

誌雜究研の居芝

鎮 類 振

輯七十三百第・年三十第

昭和二年十月廿五日第三種郵便物認可
昭和十三年二月八日印刷（毎月一回）
昭和十三年二月十五日發行（毎月一回）
「鎮 類 振」 第百卅七號 第十三年



號慕追郎治鴈村中

ウテナクレンジングクリーム

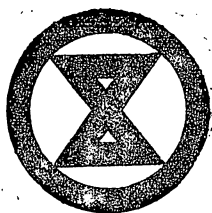
御婦人方に大評判の洗顔料

数多い日本の洗顔料中、最も優秀性能を持つウテナクレンジ
 ングは今や愛用者間に圧倒的人氣を占むものとなつて居りま
 す。湯・水を使用せず只塗布して拭取るだけで、皮膚深部の汚
 れまで完全に清掃する處となりますため手軽に済まされると同
 時に蕊から垢ぬけた洗顔となし美容・お化粧の充分な基礎を創
 上げるので、絶対に缺かされぬクリームとなつて居ります…

- 洗顔に
- 入浴美容法に
- 厚化粧落しに



店商吉政保久 會株式 舗本料粧化ナテウ 阪大一京東



近づく春！

お仕度は

良品廉價のそごうで！



大阪
心齋橋

そごう



★道頓堀 百三十七輯 目次★

表紙 紙 六花撰 妹脊平三

グ ラ フ

- 歌舞伎座——六花撰・新版歌祭文・妹脊山婦庭訓・おもげ如月帖・
鴈治郎展に見込る芳子嬢・恭太平記白石噺
- 中座——華やかな夜景・子は誰のもの・三等局長・新婚虎の巻
- 角座——母の曲・逢魔の辻

半二の舞臺構成……………高谷伸(三)

宮城野・信夫の實説……………梅徑莊主(二五)

演劇雑考……………藤原羊平(二六)

菊五郎の役々……………渥美清太郎(三〇)

六代目の役々……………森ほのほ(三)

その時折りの話……………大橋孝一郎(三)

妹脊山つれづれ……………西尾福三郎(四)

鴈治郎 繪・八百屋半兵衛……………山口舂平(三)

追慕 鴈治郎八百屋半兵衛……………森ほのほ(三)

端もの唄・お千代半兵衛……………(三)



華やかな夜景

村山 知義 (三)

リボントウド
ンヨシクセ

かにかくに道頓堀は 伊藤駒七 (三)
戀しかりけり
成駒家皇軍慰問記 大槻たもつ (四)
時間! 時間!! 妹脊平三 (四)
新婚特急・富士と燕 B・B・B (八)

りぼんとうど
んよしくせ

亡父鴈治郎の思出
敏夫漫筆

林 長二郎 (三)
林 敏夫 (六)

無題
新兵行進曲

大友柳太郎 (七)
中村時三郎 (五)

坐二

河内屋樂屋話

(三四)

談題

再聞黄泉廻鴈聲

新橋柳一郎 (四)

横顔を描く

延若君シツカリ

高安 吸江 (四)

道頓堀・芝居

佐々木工之 (五)

映畫演劇の「浅草の灯」を観て

大久保佐陽子 (五)

讀者のページ

(五四)

カッ

ト.....正 樹 生

★編輯雜記

源多徳三郎 (六)

銘酒

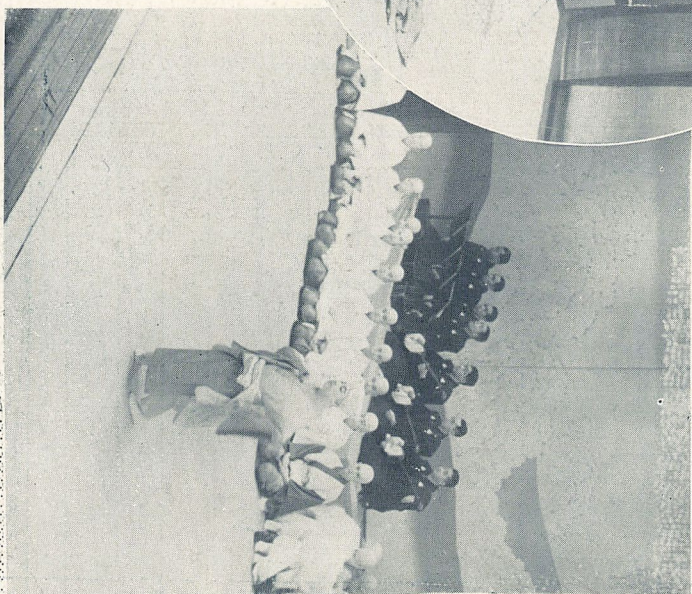
白雪

攝津伊丹灘 小西酒造株式會社





「六歌撰」は初代風雛助の「容彩六歌撰」を抄本として、二代目芝翫といつた四世歌右衛門が五變化の一つとして勤めたのが、今日も残るもので、所作劇中の壓巻である。



歌 舞 伎 座 ・ 東 西 大 同 歌 舞 伎

る跡を「撰喜」と「屋文」が鄭五菊の玉座、録貫の「主黒」の岩延に上
 ？後絶前空に随はと品氣の「平業」
 〇うらあて「撰歌六」の



人形に魂を打ち込んだやうな傳統歌舞伎の
舊殻から蟬脱して、生々しい乙女心のお光を
更生させやうとするところに菊五郎の面目を
見出すべく、延若の百姓久作、梅玉のお染、
宗十郎の久松他、當代名優を描へての本格的
舞臺は、今更ら何をか言ふべくもない。

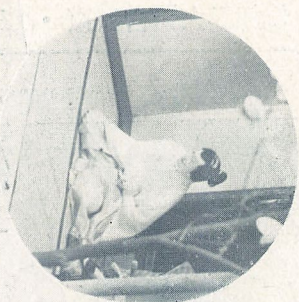
(寫眞・野崎の舞臺面)



中村鴈治郎追慕興行

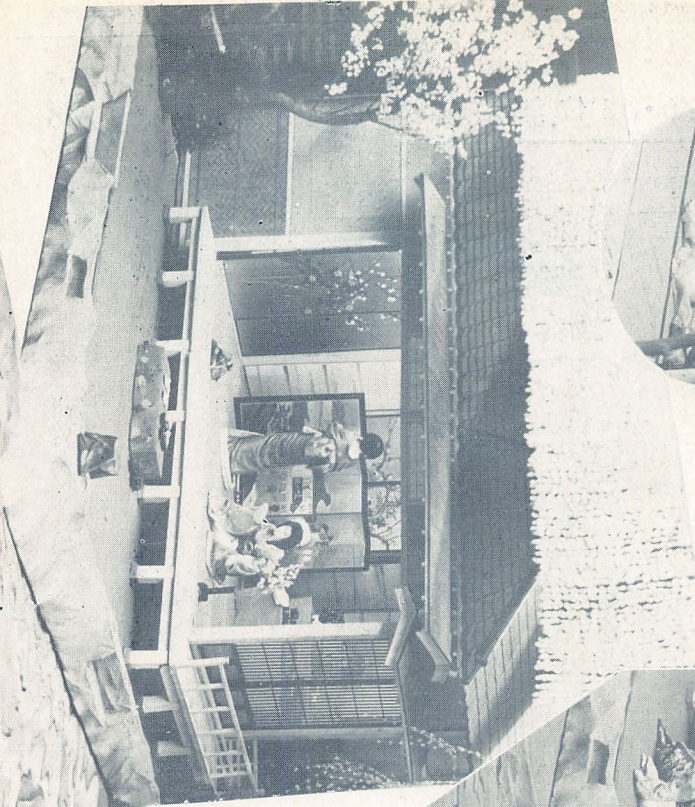
歌 舞 伎 座 ・ 東 西 合 同 大 歌 舞 伎





歌 舞 伎 座 ・ 東 西 合 同 歌 舞 伎

せ稱と作表代の物朝王謂所、妙奇の味趣、大維の想勝
 ば場の川野吉るれさ場上度今に持がるあでのもゝら
 我久の郎三長、高定の玉梅、事判大の若延、く深起興
 満を味翻麗の伎舞歌てひ崩役のどな鳥雛の雀扇、助之
 (面臺舞「訓庭女婦山香珠」は真鶴) るるささ奥





「久唄」と「治紙」言狂り當の郎治鴈故 (下)
 子芳、衛兵治が郎三長、でのもたし化臺舞を
 長) 夫敏他のそ、し扮に久唄が雀扇、春小が
 動總系直でどな (息郎二長) 年成林 (息郎三
 るあで「帖月如げかもお」きべふいと劇員
 とつうに展郎治鴈たれら飾に座伎舞歌は (上)
 嬢子芳る寄とり

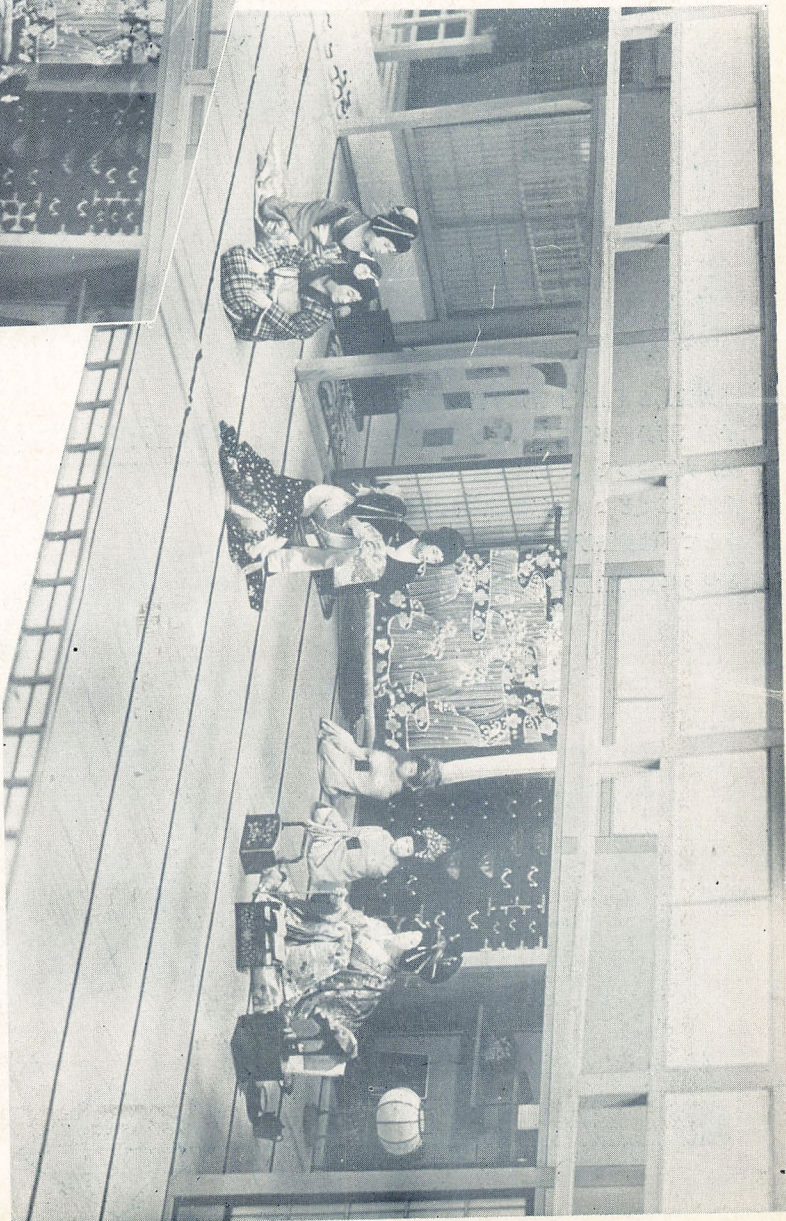
伎舞歌大同合西東・座 伎 舞 歌



郎 治 鴈 村 中
 行 興 慕 追

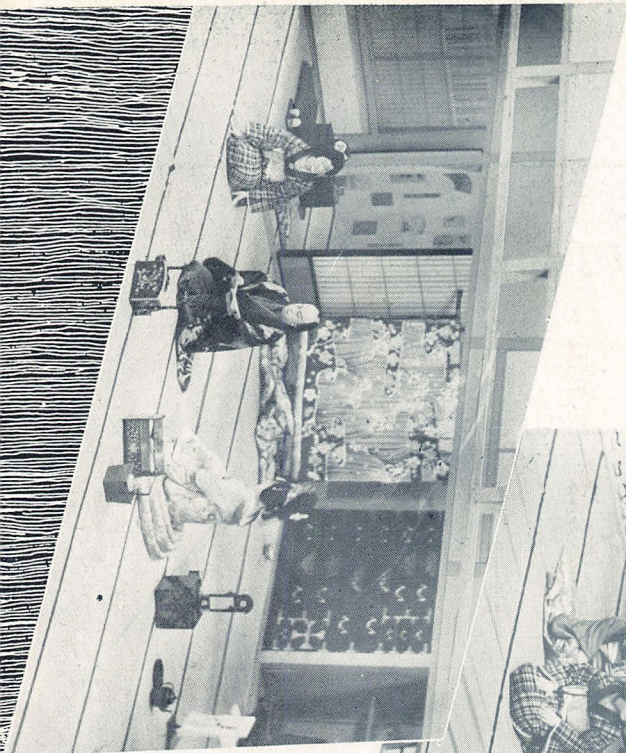
歌舞伎座・東西合同大歌舞伎

珍しい「白石噺」揚屋の場
は宗十郎の宮城野、尾雀のしのぶ
延若の惣次で力演してゐる。



を意創がだ役初、はぶのしの雀
仁の六惣、く深味興で出演たへ加
てしと出演新はし返文證る依に俟
るゐてれき判評

行興慕追郎治鷹村中



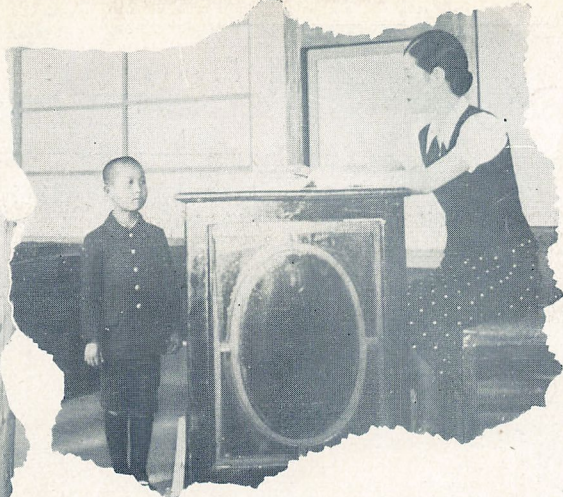
金鶏印罐詰 二大製品

- 1. 純良精選の牛肉
で御座います
- 1. 不意の御來客に
- 1. 御酒ビールの御友に
- 1. キャンピングに
- 1. ハイキングに
- 1. 各地百貨店
著名食料品店
に販賣致して居ります
- 1. キンケイ印を御指定下さ
い



洋酒・食料品・罐詰問屋
 大阪市東區豊後町三番地
 株式會社 横山商店

中座・井上水谷・合同劇



(上)

るけ於に「**のものは子**」

田村、導訓島三の子重八谷水
子康妻の彦喬ノ子久嘉



(左)

るけ於に「**景夜なかや華**」

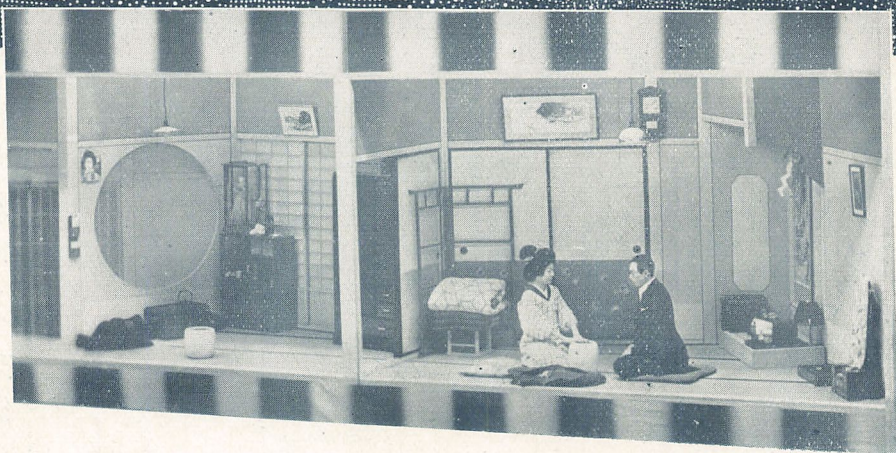
川市、長社幡因の雄俊口山

ゝらう妓藝スダの梅紅



(左)「**三等局長**」の局長吉田萬吉
の娘のぶ子に扮する水谷八重子

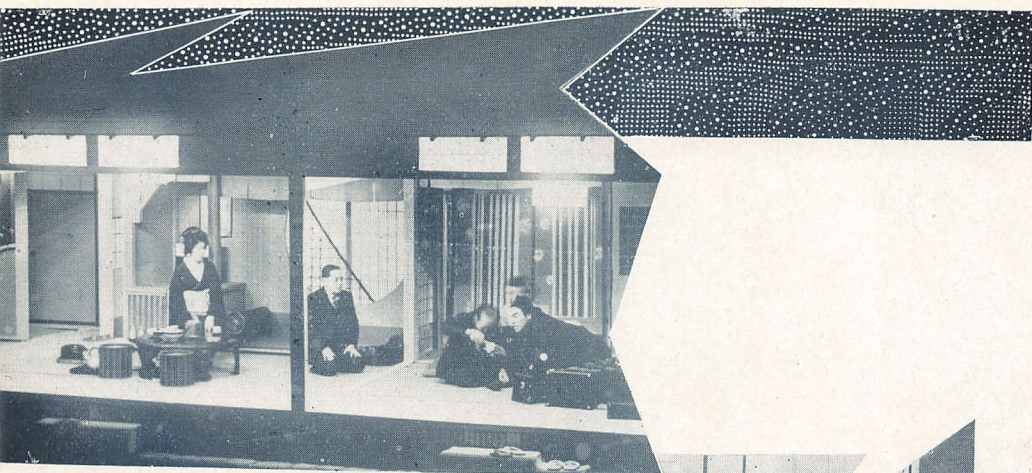




(上) 「新婚虎の巻」(舞臺面) 新婚最初の春を迎へ
た富士子(水谷)と良人相澤(山口)が忘れられぬ
ランデブーの第一の場所を振出しに脱線、また脱
線の明朗篇

(右) 「三等局長」の井上と水谷





(上) 「華やかな夜景」

(本文三十頁記事参照)

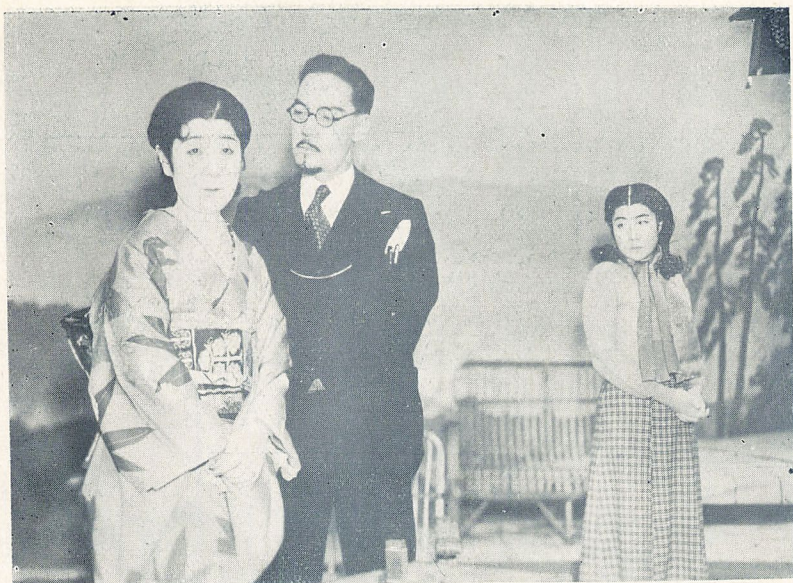
(下) 「子は誰のもの」

女は弱い、然し母は強いといふテーマに描かれた母性愛劇



角座・關西新派劇

「母の曲」瀧の娘桂子、都築のその父波
多博士、川田の女流ピアンスト藤波薫



田中の「曲の母」(内圓)



「逢魔の辻」梅野井の柳橋
のお紋、都築の同心蠣崎信
吾、小波の勤番三澤半之丞
宮村の三澤の妻雪

因みに關西新派はいよ
く三の替りから陣容
新しく、更に目覺しく
飛躍する



りぼんとうと ンヨシクセ



馬 七 井 酒

時るれ倒で臺舞が優俳たし扮に兵那支
「!!!イーザンバ下陸皇天」 スデだん叫とりかつう

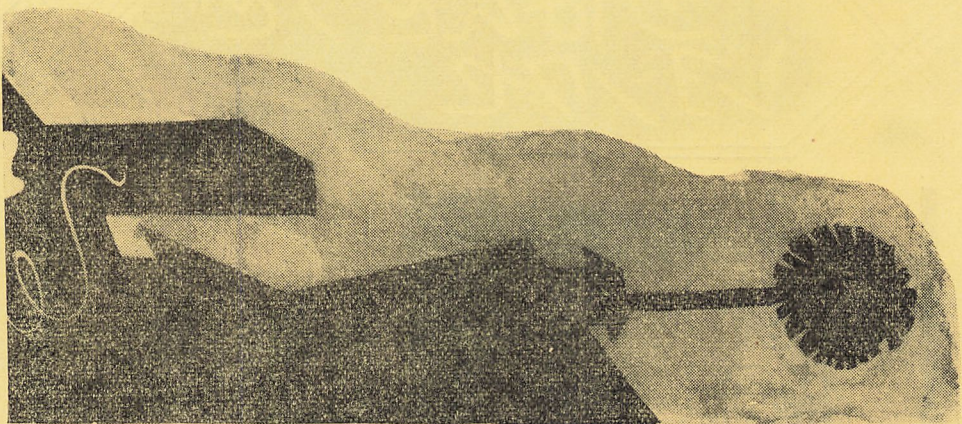
かにかに 道頓堀 恋かしり

—イ・ム・ヨ・シ・イ・ハ・リ・に—

伊坂駒七

ニユースは全部観てしまひ、歌舞伎座のタチミには時間がある、一晩のリプトンでこの二時間程はネバラならん、てな時のツレツレに、以前になゲームが僕達のグループで流行つたです。

道頓堀筋に軒を並べる店舗を間違ひなく順々に言當てる。稱して『軒並ゲム』と、角がお菓子屋、隣がたこ梅、次が散髪屋でその隣が麻雀クラブ、古本屋に眼鏡店、それから樂天座……と云つた調子で、西へ西へと我橋筋三笠屋まで来るには相當のトンボリ通でないし至難である。



南側かむと今度は北側を逆に西に
東へ、アパビル、サロンス、麻
雀グラブの階段があつて人形の衣裳屋
……と道頓堀を全部バスすると次は、
戎橋筋——ムロン橋上の乞食氏も云は
ねばなりません——それがすむと心
齋橋筋、これが一寸難物、と云ふのは
各商店の移動變化が近來ミにイチヂ
ルしい、店仕舞に付大投賣行なつて
が彼處にも此處にもと——ソレ程でも
ないズが——ガラにある状態で、こ
れは僕達グループの選手達でもちよい
くミスキャストがある。

「何、トイシシ洋品店だつて？ 半
ミ、近頃勉強が足りんぞ！」 あすこ
は今、シヨール屋ちやヨ……」

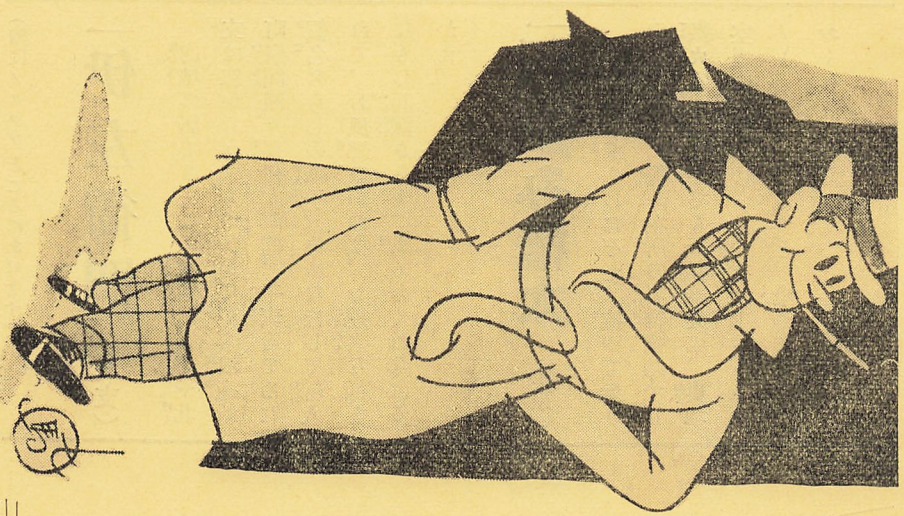
なぞと議論がフツタウするズ。こ
う云ふ意味で、變化があるだけに心
橋筋等何遍やつても面白い。
僕達のグループでこのゲームも近頃
では、日本橋筋二丁目より蕙美須町、
新世界大通り、飛田廓内大門通り——
コレハどうかと思ふ——九條花園橋筋
等々と進出してくると、實に興味シ
くたるものがあるズ。

ソレと思はん街のコよ、一度はコ、
ロミでござらんさい。

トンボリの舗の名なぞ

云ひ當てゝ今宵も興ず

あはれ街の子



(繪はメクツタとこゝろにあります)

一伊左衛門 (北支)

内地に居てさえこの寒さ、さぞや北支は寒からう、ふつゝかながら浪速新町慰問團々長伊左衛門、平素着てゐた假名ちらしの紙子、染めなはして綿入れて、お風邪ひかぬ様、お達者な様となもし兵隊さんえ、着ておくれなはるかえ。

二いがみ權太 (南京)

さあさ、來ましたぞえ、持つて参りやしたぞえ、俺が在所の名物彌助すし鐵火でもあなごでもお好み次第、奥地空爆の出發前に一寸つまんでムーシャく、うんとこさつと、喰つてやつておくんなはれ。

時間！ 時間！

妹 脊 平 三

演劇の上演時間は斷じて午後十時三十分限りまかり成らぬといふ嚴しいお達しに依つて狂言方も俳優も此處しばらくは腕時計とニラメツコ。

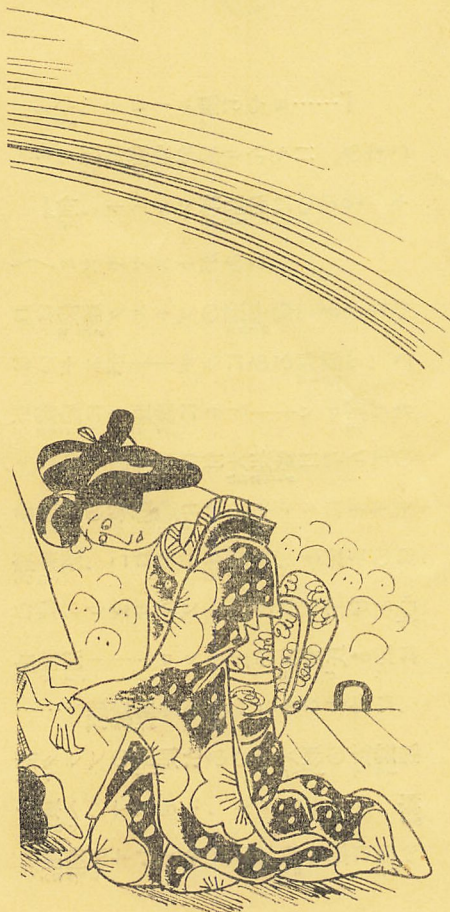
『なにが、なににして、なんとやら……』

(小サナ聲) あと一分やぜ！

『でも、さても、お名残惜しい……』

——でチヨン——只今の時報は十時三十分で御座いました……どなた様も

十時三十分にお合せ下さいませ……S……O……U……K



三紙屋治兵衛（北支）

お寒うござります、お寒うござんし
 よう、紙屋商會の慰問團でござんす、
 もそつとの物をと存じましたが、さて
 これと云つて無し、專賣特許の時雨の
 炬燵、炭火要らずに温まる小道具なが
 ら無くてはかなはぬ、さあさ、ずーと
 おたり下され。

四梶原平三景時

（海上）

想へばこの度の合戦に百幾萬の敵軍
 を斬つて斬つて斬りまくられし各々方
 のお腰の業物ホ、ーこはこれ八幡の銘
 幸これなる分捕品の迫撃砲、試し斬り
 には格好の品、いでや拙者が試しみん
 エイツボキン。斬り手も斬り手、刀も
 刀も

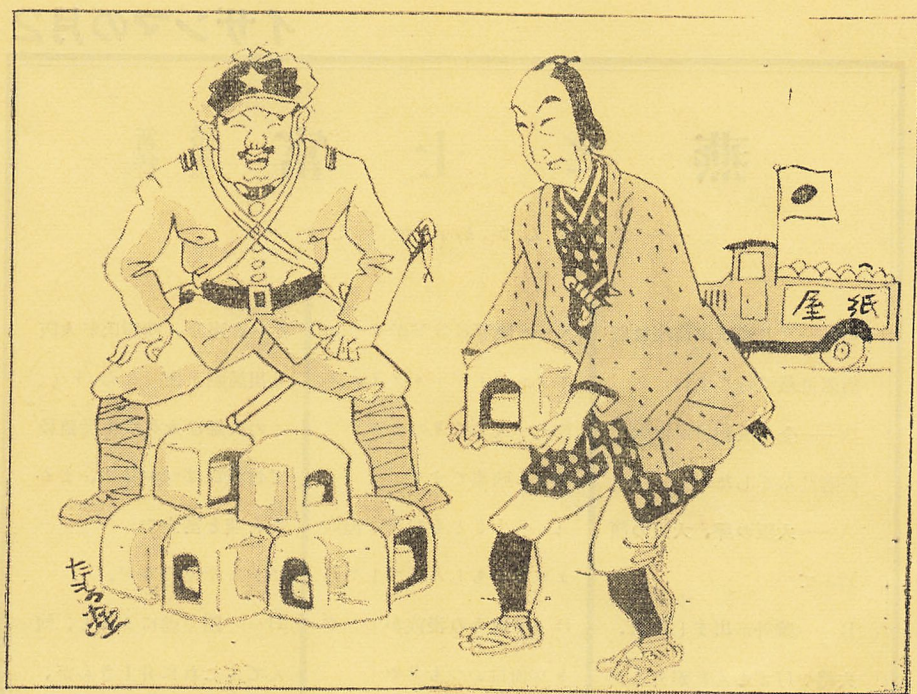
成駒家皇軍慰問記

大槻たもつ





(前のページをゴラン下さい)



(セツメイヨムトモツトオモシロシ)

燕 と 士 富 婚 急 新 特

— じうやんかとんやちえや —

A — 今月の歌舞伎座は鷹
治郎追慕興行ですれ

B — 全く成駒屋は偉大な
役者はんでしたれ

A — 大阪の聲、大阪の顔
云ふて

B — 號外が出ましたれ、
失禮やげあんたが死んだ
つて、號外出まへんやろ

A — おまはんが死んだか
て號外は出へんぜ

B — 中座は井上さんに、
水谷さんの合同劇

A — 第一演し物がよろし
まつせ、三等局長に、子は
誰のもの — 皮肉な演し物
や

B — 子は誰のもの、そん
なこと云はんかて、判つて
るやないか

B. B. B

A — 映画はSYがチャッ
プリンのモダン・タイムス

B — 久し振りのチャップ
リンの映画ですワ

A — 少くとも我々の漫歳
よりはおもしろまつしやる

B — 我々の漫歳かてソウ
トウ面白いつもりや

A — キミ！心臓強過ぎる

B — どうしても、エ、と
このぼんぼんやさかいな

A — 然し、君、中座へ來
てゐる八重ちゃんにエライ
同情してたれ

B — ソラ日本人やもん、
同情するれ、勘彌氏と結婚
僅かにして別々に働かねば
ならん、舞臺に働くものゝ
實に全くつらい處はこゝや

A — そらさうや

B — 假りに來月八重ちゃん

んが、東京、勘彌氏が大阪
と出演劇が決つたら、キミ、
この夫婦は永久に東海道線
で行違ひばつかりや、まる
で、燕と富士や

A — 全くそうや、

B — 聞く處によると、何
んでもこれに井上さんが、
えらい同情しやはつて身體
の調子が悪るいさうな

A — いま流行の感冒か

B — いや、何んでも胃の
上に!!やさうな、はい御退
屈さま

化消と却忘

忘却せる智識は消化せる
食物の如きものである讀者
を裨益すること頗る多い。
だが記憶に存する智識は胃
に停滯してゐる不消化物に
等しい……………

京都市堺町通三條 電本局(2) 長二二一八八二番

振替口座大阪 一二八三八番

新聞廣告 火災保險 代理業 株式會社 萬年社京都支店

本店 大阪市高麗橋五丁目
支店 東京市銀座一丁目

明治十二年創刊

朝夕刊八頁

日曜日夕刊八頁發行



染織日出

月拾五回發行
一ヶ月卅錢

本誌朝夕刊
購讀料夕刊ノミ
一ヶ月
金七拾錢
金四拾錢

茶

西區みずほ野

茶

南島みずほ野

スセロプ

作製板看術美

るゆらあ

告廣傳宣

社事商告廣

造勝中田

前日千阪大

番〇九七三戎電
ルクナミ

茶房ギン

南地坂町相生橋筋東入リ
電話南 四九〇三番

うまいトンカツ料理
こ、香り高きお茶を
暖爐の傍で……
冬の夜寒のひと時を！

京都日日

斯界の明星！！

京都市烏丸通丸太町

京都日日新聞社

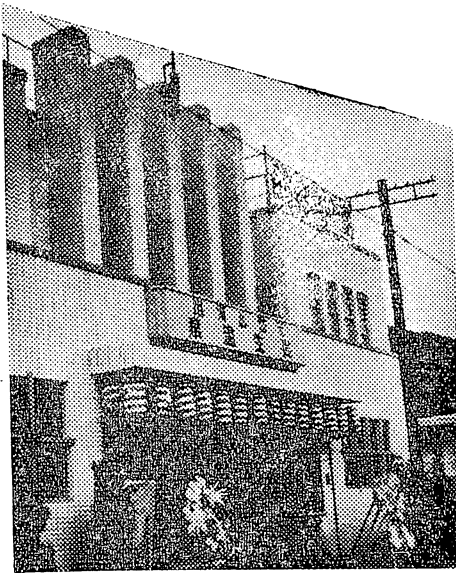
電話※三六・三七・三八・三九・四〇番
上局（長四八・四九・五〇番）
振替貯金口座大阪二九〇二三番

團劇生長專屬

演 公 回 二 夜 晝

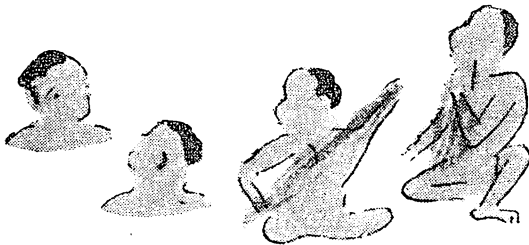
市内唯一の
天然湧出
長生温泉

お家族連れにて一日中氣樂に遊べる



場 大 内 備 設

大餘興場	娛樂室	大食堂	喫茶室	喫茶場	宴會場	拉球場	屋上運動場	特別休憩室	賣店等アリ
------	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-------	-------	-------



此 花 區 四 貫 島 嘉 永 町 七

市電四貫大島通三丁目下車北へ入ル半丁
電話土佐宛④三二九番

感じのよい和室洋室があります
御宴會(和食洋食一品料理)團體の御申込みは
何時にても御相談に應じます。

月刊・演劇雑誌・雑誌
通類編

第 三 十 七 輯

追慕興行

おもひかへす昭和十年二月一日午前五時二十分、名優中村鴈治郎死去——この時長谷川伸先生は小誌に左の所感を寄せられた。いま大阪歌舞伎座では、冴え返る浅春の寒さに紅提灯を揺らがせて鴈治郎追慕興行を開演中である。當時を偲ぶものともなれ、先生の寸考を敢へて再び左に掲げやう。

將來は知らず目前、上方の二番目物がうしなはれた愛惜は、この人を失つて今更ながら至極です。

あるものが無くなるのは約束ですが、ぼつきり折れた感じがどうにも強い——現在の上方俳優諸君は團菊去つたのちの東京劇界と同じ立場にあることを知つて、奮起すべきです。それでなくては鴈治郎記念は他にありませんまい。

長谷川 伸



菊五郎の役々

渥 美 清 太 郎

「野崎」のお光に於る菊五郎の演技は、優が義太夫劇に對する演出上の抱負と用意とを代表したものと見る事が出来やう。義太夫劇の演出に際しては、人形のゆき方や、義太夫の語り方

を、無條件に呑み込んでしまふため、兎角に生きた人形になり易い。セリフでも演技でも上ツてゐるする場合が多い。義太夫の詞は、木偶を活かすため特殊な言ひ廻しが工風されてゐる。生

きた人間の演じる場合に、その通り眞似たとて適するものではない。仕草は勿論のことである。若い人たちのやる義太夫劇には、ともすると本行鵜呑みの弊がある。

菊五郎のお光 は用意周到である。

セリフは先づこれを歌舞伎に還流し、然る後、今の若い人にも理解出来るやう、適當に近代的扮飾を施してゐる。仕草の工風に至つては勿論、深い研究を瀟過したものである。それが時には

中年以上の見物の、殊に文藝愛好者によつて、寫實に偏すると云はれる理由であるが、私は時代を忘れぬ菊五郎の用意を推賞したい。

「野崎」を出す以上は、今の見物にお光を理解させなければ意味をなさない



昔の型を辿るだけでは必ず今の人の氣持と衝突する。義太夫劇をそのまゝの形式で現代の舞臺に上せる以上、菊五郎のお光に對する如き用意は必要と思ふ。だから菊五郎のお光は、若い人たちを泣かせる事が出来る。

あの一幕から先のお光の煩悶は、誰しも興味を持つて考へられることであるが、従來の型ではそれが實行されてゐなかつた。菊五郎のお光は幕切に次の幕のお光の氣持を充分に表現してゐる。これも今での義太夫劇の技巧として上乘の工風と思ふ。



菊五郎の「船辨慶」は後ジテに大工風が施されてゐる。梅幸その他の從來の型に、いろいろ獨特の案を加へて、凄味と迫力を増させてゐる。寢鳥の手の件、笛と太鼓を活用した幕外の引込

みななどが、その主なものである。殊に幕外の引込みは、本行を離れた純歌舞伎の行き方に還つて、素晴らしい効果をあげる。何とも云へない「強さ」に打たれる。大阪でも既におなじみであらうが、あれも従來の幕いっぱいに渦巻で入るのに比べて、菊五郎の工風が特にすぐれてゐる事を證するものである。靜の方も工風はあるが、後ジテほどではない。烏帽子の落ちる件、引込みの合方に乗る件などは推賞したい。

日本の古典舞踊には、何かしら一種「わざとらしさ」が伴つてゐるやうな氣がする。「わざとらしさ」と云つていけなければ、どこかに見物を對照といふ意識が、あり／＼見えてゐるとでも云はうか。

菊五郎の「文屋」や「喜撰」を見てゐると、斯うした感が少しもない。爲に時折、スウツといふ心持が眼から

通つて、特に巧いとか、上手だとか感じない事がある。ところがその後で外人の踊を見ると、忽ち菊五郎の巧さを思ひ出す。菊五郎の「文屋」と「喜撰」は、さうした踊の代表だと思ふ。勿論、見てゐるうちには我を忘れる。幕がしまつても快感が残つてゐる。明日になつても残つてゐる。残つてゐるうちに外の人の踊を見ると、初めてまざ／＼と巧さが身に浸みる。「船辨慶」のやうな踊だと、また變つた形で巧さを感じるので、これは古典舞踊だけのやうに思はれる。

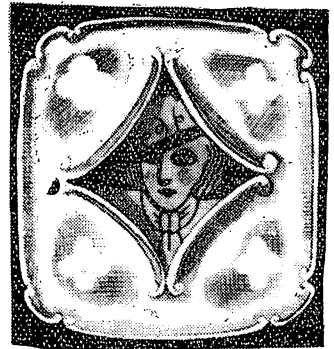
十二月に三津五郎の「喜撰」で、菊五郎は茶汲を踊つた。いつもの「靜が伏家を嫌つて」、「喜撰」本來の曲によつて踊つたが、これが又堪らない巧い味のある踊だつた。大阪の方々に見せたいものである。

菊五郎の「暗闇の丑松」は、戯曲を

活かすとはこんなものだといふ、標本みたいな芝居である。菊五郎以外、誰がやつたつて、あんなに面白くはない。なる譯がない。それは作者も云つてゐるが、見物も充分領ける。寫實藝の極致である。菊五郎が特に興味を持つて創りあげた絶品である。初演の時、私は十五度ばかり見た。それで少しも飽きなかつた。

藝ばかりではない、菊五郎の演出の巧さがよく解る芝居である。菊五郎の神経がどんなに隅々まで届くかといふ事が解る芝居である。丑松といふのは江戸時代の人間だ。一つ間違ふと今の見物に疑問を投げるやうな芝居だ。菊五郎の丑松は、全く現代劇同様、見物に些の迷ひも與へない。悉く理解させながら楽しませる。

菊五郎が、今の見物をよく知つてゐる證據だ。その證據が「暗闇の丑松」だ。



半二の舞臺構成

妹背山と野崎を通じ作家半二を語る

附—白石嘶の作者

高谷伸

世界の異色であるわが歌舞伎劇の舞臺機構に二つの特色がある。それはいふ迄もなく花道と廻り舞臺である。

廻り舞臺のことは姑く措き花道を活用してゐる芝居はかなり多いが、兩花道を巧みに活かしてゐるものゝ適例に先づ挙げられるのは「妹背山婦女庭訓」の三の切山の段と「新版歌祭文」の野崎村の幕切とで、どちらも二月の歌舞伎

座に出るものである。

作者は共に近松半二である山の段では舞臺を妹背山に二分し兩花道をこれにつゞく道と見たて道は舞臺から遠く客席の後部揚幕まで續いてゐる。そして舞臺中央を流れる吉野川は観客の人波までも泡と見て、これも後部まで流れてゐる。

また野崎村では兩花道を堤と川とに見てお染と久松とを

舟と駕籠とに乗せたまゝ遙かに大阪まで別々の道をつゞけて行く。

これらはもとより竹本座の操り臺本として作られたもので殊に妹背山は明和八年竹本座復興策の一として書卸され三代目吉田文三郎や大判事定高を掛合で語つた染太夫や春太夫の藝と相俟つて顧勢を挽回せしめた名狂言である。それらは花道を用ひたものでは

ないが同年大阪の小川座以來巧みな歌舞伎化と共に動かすことのできない模範的演出を作り上げたのである。

半二の作品を見ると、巧みに舞臺の並列的進行を用ひてゐるのが多い。これは歌舞伎に轉じると一層臨劃が大きくなつて、より以上の効果を收めてゐる。

この山の段の背山の太判事と久我之助父子妹山の定高と

雛鳥の母子の芝居が並列的に交互に進行して行くことは近松の『信州川中島合戦』の四段目といふ手本があるにしても、同作者の『本朝廿四孝』の十種香の八重垣姫と満衣の左右均齊の構圖を一步進めて機構をより大きくしたものと見ることが出来る。

野崎村の堤と川とは操りの横の並行線を歌舞伎の縦の並行線と置きかへた點はあるがこれも劇場全體の左右均齊といふ點にかなりの考慮が考へられてゐることが察せられる。この點などから考へて近松半二は作者であると共に偉大なる演出家であつたことを考へずにはゐられない。私は嘗て院本の三大作家を検討して

近松村左衛門は文學者、竹田出雲は劇作家、近松半二は演出家だと言つたことがある。その所説は放送もしたのでから或は讀者の御記憶に残つてゐるかもしれない。三人とも偉大な作家ではあるが、それ

ぞれの特質に就ては一言にしていへば、かくも言ひ得ると思ふ程、半二には演出的才能の閃きが顯著なものがある。

.....

妹背山の山の段は私のみた大芝居は大正十二年三月の中座が近來でのものだつた。大判事は多見藏、定高は梅幸、久我之助は鴈治郎、雛鳥は雀右衛門といふ顔觸れだつたが今は皆故人になつてゐる。あの時のおもしろさは今も忘れ

られない。それ以後では京都南座でその翌年荒五郎と先代吉三郎の大判事定高に扇雀の久我之助で見たが同日の論ではなく、しかもそれ以來關西の大舞臺では出ない名狂言の一つである。

この幕切近くに大判事が「閻魔の廳を名乗つて通れ」と言ふ見せ場がある。この明治のある俳優が帳簿を繰るしぐさを見せて嗤はれたことがある。これは廳を閻魔帳と間違へたのだといふナンセンスな逸話として紹介して置く。

.....

野崎村は度々見てゐるが故人雀右衛門のお光が傑れてゐた。菊五郎のお光は昭和十年二月京都南座で見たが、優獨

特の内面描寫があつて、同じ六代目の堀川などと共に淨瑠璃が一通りすんでからもう一と芝居を見せるといふ新演出がある。

附、白石噺の作者

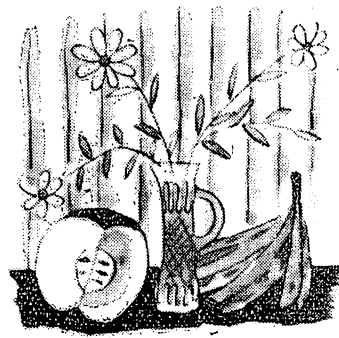
ついでに『基太平記白石噺』は私も宮城野は歌右衛門、梅幸、巖笑等、しのぶは宗十郎、雀右衛門等、惣六は中車、多見藏、先代梅玉等を見てゐるがどれも東京、京都で大阪では近年では中座の晝間興行で昭和九年九月に若手の見たきりである。雀右衛門のしのぶは巧かつたが寫實的な扮装に驚かされたことがある。この狂言の作者は紀上太郎鳥亭焉馬、客揚黨の三人で、傑作のすくない江戸淨瑠璃の

代表的作品。面白いことにはこの紀上太郎といふのは南の三井家の主人八郎兵衛高業でそれが大部分を書いてゐるが

今度上演される淺草と吉原は鳥亭馬の擔當した分である馬馬の歌舞伎年代記は有名なものである。

……そして妹背山は明和、野崎村は安永、白石噺は天明度の作品でつまり打續く明和、安

永、天明三時代の代表作が一度に見られる譯なのであるとも言へる。



宮城野・信夫の實説

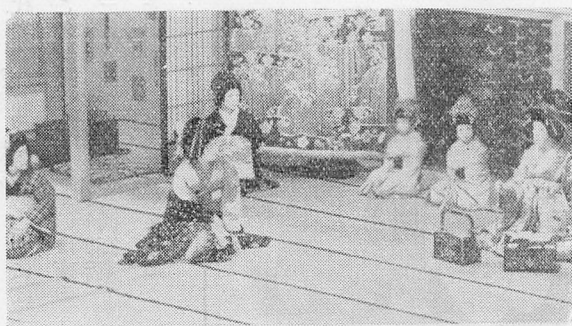
梅徑莊主

今から二百二十餘年前、時は享保の頃、仙臺侯の劍術師範役で瀧本傳八郎といふ二千石のお武士がありました。名花宮城野の萩を吹き亂す野分の風が、いつか木枯らしの音

と變つた或夜のこと、ふと夢から醒めた傳八郎、廁へ立つて行きますと、澄み渡つた初冬の夜氣を破つて、思ひがけなく鋭い洩えた物音を耳にしました。

物音は道場の方からで、それは正しく木劍のかち合ふ音であります。殊勝な門弟もあるものかな、それにしてもこの眞夜中に不思議なことゝ、忍び寄つて戸の隙から覗いて見

ると、これは又思ひも寄らぬこと、半日程前から雇ひ入れた小間使のおすみ、おたかの姉妹ではありませんか。女の身で眞夜中の太刀打、無論慰み事でないのは知れます。こ



れには深い仔細があるに違ひありません。併しそれを訊すのは、暫く待たうと、聲を掛けずに凝然眺めて居りました。打つ刀、受ける刀、斬るも、拂ふも、眞剣の氣合が籠つて

りました。

それから數日の後、傳八郎は密かに二人を呼び寄せて、事の仔細を包まず語るやう、そして、次第によつては力を貸さうと言ひ出しました。

姉妹は女の身で道場を汚した罪を詫び、二人の身の上を隠さず物語りました。

それは次のやうな経緯であります。

時は享保二年の三月五日、雛祭が済んで間のないことであります。伊達家の家老片倉小十郎の家來で、千石取りの田邊志摩といふ若い侍が始めて領内巡見の役に當つて、出役して居りました。白石在の足立村へ廻つて來た時、同村で苗字御免の家柄、矢倉四

郎左衛門の家へ立ち寄らうとして、塀際の道を表口の方へと廻りかけてゐました。

従來、檢見衆や代官が此村へ出役した場合、由緒ある家柄の四郎左衛門の處で休息するのが例になつてゐました。處が初めてのことであつた爲か、この田邊志摩は先觸れも無く違つて來たので、勿論、四郎左も巡見の事を知りませんでした。

四郎左は隣村へ行へ用事があつたので、十才になるおすみに妹の八つになるおたかの面倒を見るやうに言ひ置いて我家を出ると、道の角で思ひがけず一人の男に突き當りました。不幸にもそれが田邊志摩の供先であつたので、ほん

の出合頭も、供先を割つたといふ口實を與へることになりました。四郎左は一向に土下座して詫びましたが、役目を笠に、思ひ上つてゐる若年の志摩はどうしても聞き入れません。おすみとおたかは子供心にも表の方が騒がしいので恐る／＼見に行くと、其處には自分達の父が土下座してゐるではありませんか。ハツと驚いて父の方へ駆け寄らうとした時、ピカリツと白刃の閃くのを感じると、悲しい叫び聲と共に、父の體は大地にどうと打ち倒れました。

この四郎左の突然の横死に就いて、村の人々は沸き立ちましたが、四郎左の死んだ女房の兄に當る清左衛門は、逸

り立つ一同を言葉^{ことば}を盡^{つく}して引留^{とど}めました。何にしてもこの無禮^{むれい}打ちの起因^{きん}を知^しつてゐる者の無い以上、訴^うへ出るとしても理由^{りゆう}が立ちません。結局『長い物には巻^まかれる』の警^おへに従^{したが}ふのが上分別^{ぜうぶんべつ}なのであります。

四郎左衛門^{しろうざゑもん}の葬式^{そうしき}が済^すむと間^まも無く、姉妹^{せいて}は清左衛門^{せいざゑもん}の處^{ところ}へ引取^{ひきと}られました。さうして月日は早く、三周忌^{さんしゅうき}が無事に済^すまれました。それにつけても姉妹^{せいて}が悲^{かな}しみを新にしたのは言ふまでもありません。十三のおすみ、十一のおたかの小さい胸^{むね}の中にもいつか復讐^{ふしう}の念^{ねん}は燃えてゐました。二人は相談^{さんだん}の上、出來る事ならば仙臺^{せんたい}の家中^{けちうち}へ奉公^{ほうこう}したいと申^{まを}しました。併し清左衛

門^{もん}は、もう一二年^{いねん}を待^{まち}てと言^いつて、直^すには許^{ゆる}しませんので或日夜^{やみひ}明けを待^{まち}つて姉妹^{せいて}はそつと家^{いえ}を脱^ぬけ出し、仙臺^{せんたい}さして走り^{はし}りました。二人の家出^{またり}が知^しれると、清左衛門^{せいざゑもん}は自分一人^{ひとり}でその跡^{あと}を追^おひました。そして幸^{さい}ひにも城下^{じやうげ}近くで追^おひ付^くくことが出來ました。

瀧本^{たきもと}傳八郎^{でんぱちろう}の屋敷^{やしき}へ姉妹^{せいて}が小間使^{こまじ}見習^{みな}ひとして住^すみ込むことになつたのは、それから間の無いことで、清左衛門^{せいざゑもん}の盡力^{けんりき}に依^よつたのは申^{まを}すまでもありません。かうして半年^{はんねん}餘^{あまり}りを過^あす中^{うち}にも、毎日^{まいにち}劍道^{けんどう}の稽古^{けいこ}を見聞^{けんもん}きしてゐる姉妹^{せいて}が女^をながらも復讐^{ふしう}を堅^かく誓^{ちか}ひ、密^{ひそ}かに技^{わざ}を練^ねらうとしたのは當然^{当然}ですが、偶々^{ぐぐ}さういふ好運^{こううん}に恵^{めぐ}まれたのは、亡^なき母、

亡^なき父の靈^{れい}の力^{ちから}でもあつたのでありませう。

二人の身^みの上^{うへ}を委^くしく聞^きいた傳八郎^{でんぱちろう}はその心根^{こころね}に感^{かん}じ入^いつて、必ず仇討^{あひだち}を遂^とげさすやう力を添^そへることを誓^{ちか}つて、二人を慰^{なぐさ}め勵^{はげ}ました。姉に鎖鎌^{くさりかま}、妹に長刀^{ちやうたう}、太刀の外にそれを習得^{しゅうとく}させたのも、傳八郎^{でんぱちろう}の周到^{しゅうちゆう}な戰略^{せんりやく}であつたのでありませう。

かくて享保八年四月一日、仇討^{あひだち}は仙臺^{せんたい}城下^{じやうげ}白鳥明神^{しらとりめいじん}の社^{やしろ}前^{まへ}で行^{おこな}はれることになりました。其處^{そのところ}には十一間四面^{じゅういちけんしめん}の竹矢來^{たけやき}がしつらへられ、侍七十人、足輕三百人を以て警護^{けいご}するといふ華々^{わわ}しさ、太守^{たうしゆ}も忍^{しの}びで見物^{けんぶつ}するといふ有様^{ありさま}でした。當日^{あつじ}、姉のおすみは鎖鎌^{くさりかま}、妹のおたかは長刀^{ちやうたう}で、志摩^{しま}が二尺八寸の業物^{わざもの}に立向^{たむか}ふ

ことになりました。姉妹^{せいて}の後見役^{ごけんやく}として傳八郎^{でんぱちろう}は嚴然^{げんぜん}と控^{ひか}へました。志摩^{しま}も相當^{こうたう}の腕前^{うでまえ}ある男^{おとこ}でしたが、孝女^{こうにょ}二人の一念^{いっぴん}凝^こつた鋭^{えい}さは勝^かつことが出來ず、三十分程^{さんじふぶん}渡り合^あつた後^{のち}、遂^{つい}に討^うち果^はたされてしまひました。本懷^{ほんわい}を達^たした上に、姉妹^{せいて}は太守^{たうしゆ}から當座^{たうざ}の褒美^{ほうび}として黃金五十枚^{ごうごんと}、衣類^{いるい}二襲^{ふく}を下^{くだ}され、並々^{なみ々}ならぬ面目^{めいもく}を施^ほしましたが、後に姉の方は老臣^{らうしん}伊達安藝^{いだあき}に引取^{ひきと}られ、妹の方は大町^{おほまち}備前^{びぜん}といふ人の妻^{つま}に迎^{むか}へられたといふことであります。この仇討^{あひだち}は、本誌前號^{ほんしぜんごう}に述べた『鏡山』事件^{けんざんじけん}の前年^{ぜんねん}、月は同じ四月、日も僅かに二日違^{ちが}ひでありました。

『鏡山』の忠婢^{ちゅうへい}おさつも、此華々^{わわ}しい仇討^{あひだち}に必ずや感激^{かんげき}してゐたのでありませう。

1. The first part of the document is a header section containing the title "THE EFFECTS OF THE 2008 FINANCIAL CRISIS ON THE UK ECONOMY" and the author's name "JAMES H. M. SMITH".

も亦恐らく自己の抱いてゐる思想道徳社會觀を歌舞伎の形式によつて戯曲化したのではなくして、徳川時代のそれらは斯くあつたであらうといふ一つの想定のもとに在來の古典歌舞伎の荒唐無稽や不自然や誇張を是正したと解すべきではなからうかと主張した。

是に對し友は斷じて然らず綺堂氏の戯曲に盛られた思想的内容はどこまでも綺堂氏自身のイデオロギーであり感覺である、これを菊地寛氏の忠直卿行狀記に表現された思想的内容に比較しても新古の差いくばくぞやと應酬し來り、僕は例として引用するならば他にもいくらかあらうが假に菊地寛氏に例を取つてもかの忠直卿行狀記は歌舞伎ではな

い、立派に新劇である、それは舞臺構成の形式に於てすでに綺堂氏の新歌舞伎である番町皿屋敷とは全然異つて居るのみならず、築地系の新劇俳優の人々が演じてゐる立派に新劇として通用するのに對し、綺堂氏のは新劇の人々には取上げられないものだ、それは即ち内容も形式も全然歌舞伎であるからであると抗辯したが、オヴザヴァー格の畫家の友もこの論争何れに軍配を揚げるべきやの去就を決しかねた様子で結局三人共向よく研究しやうといふ事で未解決のまゝ一先づ筆を收めた次第である。

尤も此論争では派生的に今日の商業劇場の興行法に對する非難や俳優、上演脚本への

不滿などに言及はしあつたが中心は前述の如く岡本綺堂論であり歌舞伎論であつたのである。サテこんな事で寒さと眠たさを我慢して徹夜で論争したものの、本來事芝居に關しては此二人の友よりも一日の長であらねばならぬ筈の僕立所に理路整然と相手の誤謬(?)を征服せねばならぬ筈の僕が、その用意を合さなかつた事は甚だ耻づべきでもあり、それどころか冷靜に考へて見ると、僕の见解が誤つてゐるかも知れぬといふ不安も多分にある。そこで再會を期して此宿題に解決のキイを與へねばならぬ行掛りからも今更の如く参考書を漁つて研究に資してゐる體たらくであるが、かうした内幕話を書けば

劇壇の先輩諸君から今時何とくだらない事を論議してゐるものだとか嘲笑されさうな心配もある。どちらの主張も間違つてゐるかも知れないし、あはれにも演藝記者である僕の所論が全然的を外れてゐるかも知れない、何れにしても此程度の論議はすでに先輩仲間とくに解決されて居る事であらうし、若し然りとすれば僕達の迂闊さを耻ぢなければならぬが、卒直に云つて僕は今時こんな綺堂觀を振廻してゐるのであり、それも眞向から反駁されるとタヂ／＼となつて完全に相手を説伏するだけの何物をも持合せてゐない事を告白して敢て先輩諸賢の教示に浴したいと思ふのである。(昭和十三、一、十六)

「華やかな夜景」演出

村 山 知 義

北條秀司氏を初めて知ったのは新國劇の『表彰式前後』であつた。

その結末や、演出やにいく

らかの疑問はあつたが、私は

この作者が、社會や人情の機

微に通じ、また觀客の心を捕

える術でも知り、既に老熟し

た筆を持つてゐるのに驚いた

その次の『丸の内英雄傳』

といふのは見落したが、私の

友達達も、なかなか面白く、

鋭いものと云つてゐた。

『華やかな夜景』を読んだ

時、私はすぐにこれはあたる

と思つた。果して、明治座十

一月興行で非常に當つた。

それは同時に上演された『

狐舎』に對して、藝術性の點

で劣つてをらす、しかも、見

てゐる肩の凝らぬ面白いもの

だ、といふ評であつた。

私は戯曲に對して、可成り

テキスト・レジーする方の演

出者だが、この『華やかな夜景』

なかつたのである。

に對しては、影ゼリフや捨て

私はただ、忠實に、戯曲を

ゼリフを加へたほか、全然、

生かすために働いたに過ぎな

手を加へなかつた。加へる必

い。

要もなく、加へることもでき

東京では、安來の妻しづ子



井 上 の 秘 書 安 來

の役は岡田嘉子君がやつたが

岡田君はこの舞臺を、初演物

の最後の舞臺として、ああい

ふことになつてしまつたので



亡父鴈治郎の

思ひ出

林 長三郎

亡父が好んで度々演じてゐました久我之助を私が演ることになりましたが、私も責任が重く随分工夫を凝らして勤める覺悟でございます

亡父の久我之助の思ひ出と致しましては私が未だ舞臺へ出ませぬ四歳の三月左團次さんとの合同劇で浪花座に「妹春山」が出ました砌り、左團次さんの大判事に亡父が久我之助を演じて居ります、舞臺へ附人の油斷を

見ました私が「お父さん」と道具の障子を開けて聲をかけ運よく見物衆に聞こえなかつたやうでしたが幕になつてから亡父の叱りつけようと部屋を探された時、私は、番頭の背中ですやゝと寝てゐたので叱られずに済んだと母から後に聞きました、——小供時代とは云へお聴かしい乍ら私としましては懐しい忘れられぬ追憶でございます

今度は新劇畑の毛利菊枝君がやる。

ほかに、女中おゆきが、村田みね子君だつたのが東日出子君に、市會議員佐竹が菊波正之助だつたのが村田正雄君が、それぞれ都合によつて變つたほかは、小さな役に至るまで、東京のとたと全く同じである。

井上氏は、眞面目な堂々とした芝居をやる一方、ファースに近い喜劇にも獨特な持味を示して來た人である。かういふユーモアの蔭に涙あり、笑ひの底に大きな矛盾が口を開けてゐるといふやうな劇の

主人公に惡からう筈がない。

今後かういふ方向へも、井上氏の獨特な味は發揮されねばなるまい。

演出よりも、まづ、戯曲が入用だ。

この演出では、向島の夜の堤に立つて、聞える音を採集したり、ダンス藝者を實地見学して、踊を習つたり、さういふ苦心のほかに、矢張り、私の演出のたびに、續く苦心——リアリスティックな、統一的な、大劇場演技の生み出しのための苦心——が續けられた。



—— 平艸口山・衛兵半屋百八 ——

『魂は武士なれど、三十餘年町人に』、いつ

か前垂掛け姿もすつかり體に馴染んでしまつた八百屋半兵衛、昔は木太刀を握つた手に、今は庖丁を取つて、七五三五六の料理も塩梅する物言ひ、物ごしの柔かい中にも何となく凜とした、地味な姿振りにもすつきりと水際立つた男前——さういふ人柄が鴈治郎といふ役者の天賦の麗質にひつたり嵌つてゐたのでした。

片里に病む、物堅い女房の實父、さながら佛心の養父、一圖に嫁を敵とする養母それぞれへ對しての心遣ひ、女房お千代に注ぐ心からのいつくしみ——さういふ義理と人情に絡まれた様々の心持を描いて行くのに、鴈治郎といふ優は深い工夫、苦心と、非凡の藝能を持つてゐました。大近松の人間半兵衛は、鴈治郎丈の靈腕を俟つて、全く歌舞伎の世界に再生せられたのでありました。

(ほ)

端もの唄 お千代半兵衛

——森 ほのほ——

春過ぎて縁も薄物 薄雲り

晴らす由なき胸の中

包む浮世の義理、情

知れど覺れぬ煩惱の

無明の闇路踏み迷ふ

心卯月の宵のほご

死なば一所と契る身の

人目を忍ぶ女夫連れ

手に手を取つて西の國

退いても消えぬ取沙汰の

ざざんざの聲 松の聲

吹き傳へたる濱松や浪花の里に
残す世語

河内屋

くやじんのはかつい

名優坐談

語のもる延若丈と記者
日・ことろ 一月十七日・中座樂屋

「阿漕」

は大變面白く拜見しました。今日で既う三度目です。

それは御熱心だんな私もかなり工夫はしたつもりだすそれに久しう出ん物だすよつてな……。

私は東京の新富座で壽美藏君と亡くなつた市藏君のを見たぐらゐ

で、素淨瑠璃では度々聞いてゐますが……。何にしても、『官兵衛砦』や、この『阿漕』のやうな古典物は今の中にドシドシ見せて置いて頂きたいものです。

仰有る通り、どちらも餘り出ぬ物で、私は大分前に市藏さんの次郎藏で平治をしたことがありましたし、亡くなつた又五郎さんのお父さんの紫琴さんのお春で勤めたこともありました。此時はまだ十五六で、紫琴さんが附合うてやると言はれるので、お母の方かと思つてゐたら女房の春姫の方やつたのには驚きました。

それは面白いお話ですな處で今度の次郎藏に就いての御工夫といふのを聞かせ

て下さい。

次郎藏といふ男は、やぐざには墮ちてゐますが、根は武家出で、神職の養子にまでなつた人物だすよつてそのつもりで拵へをしました。これまでは銀張りの鑿ビロードのどでらだすけれど、どうも横藏や駄六に似寄つて來ますし、五分月代では權太になりますのでな——それも私が權太を演らぬ役者なら宜しうますが——璃寛さんのしたんは、五分月代で刺青をしてゐるさうで、その錦繪を社長が持つてゐられて、その話が出ました。併し、中川右内といふ實名のある次郎藏としては、刺青は無い方が本間やらうと思つて止めにし



ました。髪も砂すりにして
刷毛先を右へ曲げさせまし
た。衣裳は前の場(阿漕浦)
が薄めの茶と、落着いた崩
黄の立縞の木綿布子で、こ
れをタテの中にスツボリ脱
げ落ちる仕掛に誂へまし
た。脱げると、下が荒い絞

りの大阪手
甲といふ漁
師姿になり
ます。後の
平治住家の
方は、黒襟
を掛けた茶
地格子縞の
布子、下に
肉襦袢を着
込んで、紺
の腹掛を掛
けてゐます。帯は黒縞布子の
角帯にしました。

あの、平治に突かれて、
上手へよろよろとなる時に
着附のすり落ちるのは、大
變面白く、派手な行き方で
結構です。

それから、あの寶劍だす

がな、海底に沈んで、夜な
く光るといふのに、袋入
りは可笑しいと思つて、二
尺程の品の好い、鮫柄、梨
子地鞘の刀にしました。

あの邊の海に多いらしい
やガラといふ魚は太刀ノ魚
に似たものらしく、そのヤ
ガラに紛ららしい刀が網に
掛かるといふのは面白い趣
向で、昔の作者が實によく
物を知つてゐるのには驚き
ます。

ヤガラといふ魚は、嘴
が細長いので、それへ薬を
注いで病人の口へ移すのや
と聞いてゐます。

つまり今の『吸ひ呑み』
の代りといふ譯で、それよ
りも藝術味がありますな。

併しヤガラは餘り食用にも
ならぬものださうで……。

この淨瑠璃では、母の膈
の病、今の食道癌だすな

その病に効く薬といふ
ことになつてゐます。

平治とのタテの合方にな
つてゐる鳴物、道具替りの
つなぎになる鳴物、それに
次郎藏の出、平治との二度
目のタテの鳴物など、どれ
も大變面白くと思ひます。

いろいろと考へて誂へを
出したのですが、お氣に入
れば何より嬉しいことだす
『扇屋熊谷』の方にも、
何かお話がありませう、聞
かせて下さい。

先づ拵へですが、六代目
(菊五郎)は『浪人めけど』

と本文にあるので、羽織も袴もキラキラせぬ地味な好みやつたさうですが、私は『尾羽も枯さぬ』の文句通りに、そして芝居らしい派手な出立にしました。二本の陣扇を見る處に『金の丸銀の丸、朱の丸』とあるのもハツキリ分りませぬし、『八本十六本陰陽の骨數よし』といふのも分りませんので、森はのほさんが京都に居られて、扇屋に御懇意の處のあるのを幸ひ、いろいろ調べて頂きました。その結果、金の丸は太陽で陽銀の丸は月で陰といふことが分りまして、扇は二本とも特別に仕立てさせることにしました。それから敦盛

の首を包む衣が『日詰』と書拔にあるのも分りませんので、これも森さんの御厄介になりましたが、これは『目結』の間違ひだったのは大笑ひでした、目結とは絞りの事やさうで、白絹に絞りを藍で入れさせることにしました。お氣がおつきになりませんか。

其處まで苦心されてゐるのですか。こちらは氣が附きませんでした。誠に不念なことで済みません。

それから、『阿漕』でも『扇屋』でも、婆アさんが時間の上から喰はれてゐます。扇屋の方は兎も角も、阿漕の母親が出ないのは、平治をする役者にとつても

春姫をやる役者にとつても損で、次郎藏のモドリになる動機も弱いものになるので困ります。イヤこれは愚痴話めいてしまひましたなアハ、ハ、ハ、。

——さういふお話も結構で、又改めてお邪魔いたしませう。

——どうぞ又お手隙に……。失禮しました。

繁華街に近く、交通至便
閑雅な和洋室！

◇モダン階上浴室新設◇

南地ホニエ

一 三圓
宿 二圓
一 半 額
一 半 憩

南地戎橋電停前
電話南四一四・四四一

★最も効果あるのは
道頓堀の廣告です

無題 大友柳太郎

いづしかに酒など飲みてほらを吹く
さみしき性質を憎まずなりけり

鮮人と肩をならべて汽車を待つ

名もなき驛の宵吹雪かな

腹へればバトを喰ひて詩を書きし

二十才の夏をなつかしむかな

誰かうしろに立ちて鞭あてたる如き心地す

疲れし日夜

戀も金も若き生命もち忘れ

たゞ狂はしく仕事してなり

きりきりと胸に沁み入るさみしさは

希ふ仕事の興へられぬこと

菜を買ふ金に困りて残飯に

ソースをかけて喰ひし頃あり

ゆくりなくニュース映畫のスクリーンに

昔の友の顔見出しけり

その昔に吾れのはうげた樞打せし

友が來りて飯を請ふかな

ひたぶるに年の若さにたよりつゝ

こゝとせをしやにむに生きし

何事かあすはよきことある如き

氣持にたよりせめてもねむる

青空に親しむ事をわすれりし

こゝとせの吾れなりしかな

——ノートブックより——

六代目の役々

森 的 の ほ



菊五郎丈の『船辨慶』は「鏡獅子」や『道成寺』等と共に、近年屢々繰返される——あまりに屢々繰返されるが、兎も角それら代表作品の一つには違ひない。併し、梅若万三郎氏や金剛巖氏の能を見なれた眼からは、前ジテにしても後ジテにしても、どうも眞實さに満たされぬものがあり迫つて来る力も弱いのである。寧ろ菊五郎丈が独自の工夫を凝らせば凝らす程、微笑を覚えさす稚氣が漂ふのである。例へば『前後を忘るばかりなり』で長刀を肩へ當て、極る際の、柄に掛けた手先を幽霊めかす等がそれであり、而もその休止即ち靜の形をそのまゝ動の形へ移す如き



○ 一月の中座で壽三郎の演じた「夜明前」を見て今更のやうに作劇のムツかしさを痛感したものである。一體この作者は、此の脚本から何を描かうとしたのであらうか、観客に何を訴えやうとするのであらうか。古來、格に入らずして格に入ると云ふ言葉があるが總ての藝術は此の域に到達しなければ、その流奥を極めたとは稱し得ない。一般の作劇法と云ふものに就いても藝の通りで、一定の型に嵌つた方式通りに組立てられた脚本は、あたかも繪畫が、垂直ホームとか三角ホームとかの構圖法にのみ

その時折りの記

— 菊五郎・井上・脚本 —

大橋孝一郎

捉へられて作の如く、構圖上の狂ひはなくとも、觀賞するものゝ側から見れば一向に面白くもないものである。何處かにたとへ一個所でもいゝから、はめを外した處がほしい、觀賞するものゝ、或ひは觀劇するものゝ意表に出でた處がほしい。私達があらゆる藝術を觀賞する樂しみは、その格に入らずして格に入つた作者の手法を見出したときが最も大きいものである。でなくば、その劇的境遇が鮮烈に私達の心を打ちめした時かのその何れかであらうが、この劇的境遇も從來の如きお芝居のための

は、小生の承服し得ないところである。

小生に言はせれば、左様な些末な點に苦勞するよりは、能の替の型を參考して、地誦に伴ふ演技の緩急の面白さを按排すべきであると思ふ。

×

『野崎村』のお光といへば私達は先づ亡き雀右衛門丈のを數へ上げる。同優のは今更らしく言ふまでもなく、人形から歌舞伎へ移入されたそれらしい香氣を、残渣を留めてゐる。其處に歌舞伎らしい甘さ、柔かさ、懐しさを覺えさせた――。

菊五郎のお光は、本文を熟讀した上で工夫された作品であつても、それは在來のお光

の完成ではなくて、寧ろ創作と言つてもいい程のものであるだけに、院本からは遠い新演出だといふ非難も投げられるのである。併し、近年省略が常例となつてゐるところの大病の上に盲目といふ哀れな生みの母の點出を必要とする

ことを主張した如き、その演出プランの確實さを語るものと言はなければならぬ。

幸にして雀右衛門丈のお光を知つてゐる私達は、その演出を菊五郎丈のそれと對比する時、一層の興味を覺える。

×

所作事の『文屋』と『喜撰』いづれも軽い、淡い、飄逸味のにじみ出る處に面白さがあるが、同じ輕快さ、飄逸さに



作りごとでは、一向に私達の心に喰入つて呉れるよすがとてもない。今日の社會機構に立脚して、その道德や争闘が劇化された場合にのみ、今日の大衆は肯定しやう。私達は如何なる場合に於ても既に時代と云ふものを忘却することは不可能なのである。例へば二月の中座で井上一座に依つて上演される「華かな夜景」は三景からなるスケッチ劇だが、此處には立派に時代の息吹きが流れてゐる。社長の前では、馬鹿踊りをも敢へてしなければならぬ一會社員のベッソスは私達の胸に焼けるやうに迫つて來るのだ。壽三郎が「夜明前」で如何ほどの力演を以つてしても、あの空ろな脚本の前では、返つて空々しい淺薄な印象しか私達には與へてあらう。演者は須く脚本撰擇の重要性を痛感すべきだ。

近頃の新劇團が興行的に

良き成績を擧げてゐるのは觀客が從來の營利劇團では満足し切れない藝術意慾を自つと新劇團に求めて行く一端の現象に外ならないので、此の影響が營利劇團をも刺戟して、井上の主張する所謂中間演劇の主旨が、大衆の趣向を向上さすための營利劇團であることは、眞とに時代に適合した榮えある方策と云はればならぬのである。殊に「東北の風」をも取上げた井上の意圖は實に壯とすべきであらう。

○

菊五郎が「舟辨慶」を演る。私は菊五郎の數多い所作の中では、取分き「鏡獅子」と「舟辨慶」とを最高傑作の双幅と稱するに吝かではない。即ち鏡獅子の柔から剛への變化の妙味に對して「舟辨慶」に於ける靜から動への變轉の妙趣は古今獨歩、啖きに聞く團十郎の靈腕を以つてしてもなほ

もおのづからのけじめがある。其處に二重の面白さがあると小生は考へて、實はその面白さを見出すべく期待してゐる。『暗闇の丑松』も同優の自信ある所作であるが、臺詞もよく通らぬ見物席からただ一度だけ神戸の松竹劇場でしか見ぬ小生には、わざと今茲に多くを言ふのを避ける。ただ最終の花道の引込み——殺人後の遁走——に當つて、眉根から額へかけて——以前新聲劇の役者達が好んで行つたやうな——青い涙を縦に一筋描いたのは、どうした了簡方なのだらうと、待ち構へた禮議の拍手を俄に躊躇したのであつたが……。

「音羽屋らしくねえ」と五代目の憧憬の醒め切らない江戸ツ子から冷笑を浴びせられた六代目は、その音羽屋らしくない姿態を驅使して、彼の五代目の遺風を繼承すると同時に、いつか新しい菊五郎を創作してしまつたのは、思つても愉快至極である。『踊だけから言つても六代目は五代目以上です』といふ讃辭を私は屢々耳にする。今更ながら今後の劇藝術は六代目菊五郎丈に待つ處多からうし、昭和の歌舞伎を創造し決定するものは、恐らくは同丈であらうと、私は心密かに欣快に堪へない。



一簪を輪すものと思はれる位である。前半の能面に凝したマスクの端麗さと紙一枚のすきもないきまりきまりの優美さ、後半の悽愴なる氣魄と、長刀をキツと高く身がまへながら、キリキリと廻ひ乍ら揚幕に入る花道の引ツこみまで、眞とに此の世のものとも思へぬ鳥さ、人智で想像以上の美しい藝道の三昧境だ。

外に野崎村のお光が良からう。髪を切つてからが此の人らしい新らしい解釋があつて、殊に道具が廻つてから、立去つて行くお染と久松の姿を左右兩分に見守り乍ら、遙かに、そしてなほ遙かに放心したかの如く瞳を見すへてゐる「間」、それからよゝとして久作の膝へ泣き崩れて行く瞬間に何とも云へない六代目自獨の巧さがある。これは昨年吉右衛門の演じた「俊寛」の幕切れと好一對をなすものであつて、この古劇を立派に近代劇に塗りかへて終つ

てゐる。堤に咲いた清楚な白梅のゆかしい香りが、まゐるお光の心そのまゝに、覆郁たる句やかさを観客席に傳へて來るである。

○「暗闇の丑松」は巧緻細密な菊五郎の手腕で脚本以上活かされた人情もので第一幕の階上と階下で演じられる醜惡な人間性の斷面は、あの歌舞伎座の舞臺機構の活用によつて、いつか神戸で感銘した以上の効果ある舞臺面を現出して呉れることゝ楽しみにしてゐる。それにしても今ゆくりなくも思ひ出されたのは、風呂屋の場て出されたのは、つた今なき蟹十郎の面影であつた……蟹十郎を失ひ、昨年また前途洋々たる松助を失つた菊五郎、良きバイプレイヤーに去られて行く菊五郎の心にはたとへやうのない一抹の淋しい影が宿つてゐることゝ思はれるのである。

(一月二十八日)

妹背山つれづれ

西尾福三郎

珍らしく妹背山の山の段が出るさうで、こちらでは確が大正年間鴈治郎の久我之助に雀右衛門の雛鳥、梅幸の定高に多見藏の大判事と云つた所で出たのが最後で、今は何れも故人になつてしまつた人達ばかり、轉た今昔の感に堪えません。何しろ妹背山と云へば歌舞伎狂言中屈指の大物であり、しかも餘程の役者が揃はない事にはめつたに出せないのがこん度の山の段でつい昨年の夏神戸で菊五郎一座の御殿の段を見せて貰つたのと共に、これこそ年来待望の珠玉篇公開と謂つべく、近來會社の企劃に携はられる方々が、時勢の要

求か何か知りませんが、續々としてこの種の埋もれた古狂言の再吟味に着目されつゝある事は寔に結構な事と存じます。

時も時、これと一緒に六代目が野崎村を見せるとの事ですが、何れも近松半二の代表的な傑作を、しかも大歌舞伎座のあの大舞臺と寛濶な見物席を劇曲中に取入れた巧妙な舊劇の舞臺技巧を飽く所なく味はせてくれるこの二作を同時に見られる事は近來での眼福と申しても敢て過褒ではありますまい。

妹背山ではあの廣い見物席がそのまゝ遙久な吉野川の清流となり、又野崎村で

は同じく寢屋川の流れと化して舞臺と客席とが暖然と溶け合つて一體となる所に獨目の面白さがあるのですから、今度の興行だけは是非でも見物席の椅子を惜しみなく犠牲にして假花道を拵らへなければなりません。

所でこの大物を眞正面から説明するとなれば到底限られた範圍では片鱗さへも描く事はできませんから、それは又の折に譲つて、今月はその妹背山の紀行を少し許りかいてみませう。

谷崎さんの吉野葛の序章に描かれたやうに吉野川の六田の橋に立つてみた妹背山、これが普通のコースで



すが、逆に櫻井から宇陀松山を通つて國栖に出で、こゝから吉野離宮の趾である宮瀧を逕て戻りに妹背山を訪ねるのも一興ですし、又吉野山を逕て奥の千本から

山越しに菜摘の里へ降り、こゝから背山を先に妹山を次ぎに訪ねるのも面白いと思ひます。

今でこそ背山は大和宇智郡に屬してゐますが、昔は

淨瑠璃の本文のやうに吉野川を境にして紀伊と大和が接してゐたもので、この地方の言ひ傳へによると或年の大洪水に背山だけが押し流されて、それが下流の今

の五條の町の近所迄移つてしまつたとか申す事です。眞偽はとにかくとして、妹山も背山も淨瑠璃に扱はれやうに、全く童話の中の存在みたいに、小ぢんまりとしてさ乍ら、お饅頭を、二つ置き並べたやうな玩具のやうな山で、背山の方は連山の尾嶺續きですが、妹山の方は獨立した小山で一面、縁樹が蓊鬱と生ひ繁り山内に少名彦命を祀つた社があります。

萬葉集の中に

大穴鞭少那彦名が造りし妹背の山は見らく愛しもと云ふ歌があつたと覺えてゐます。歌詞も文字も確實に記憶してゐませんが、とにかくこの歌にある通り



いかにも一寸法師の少名彦の神が造つたに恰はしいやうな小山であつて、いかさま後代の作者がこの山この川を背景にして

童話劇の様な趣向に豊富な詩美を盛り上げるに詠へ向きの存在であると思はせられました。

妹背山とは眼と鼻の所にある古錆びた山の町上市の吉野川に臨んだ平宗と云ふ旅館の一室で、シュン外れの名物鮎の粕漬けのホロ苦い舌觸りを娛しみ乍ら、へ

別れても、替らぬ紀の路恩愛の、娘は霞に埋もれし庵りの内へ……と云ふ淨瑠璃の一節を味はつてゐると、半二が我が、我が半二かとフトそんな幻覺に酔ふ私自身を感じるのでありました。

×
×



郎治鷹で「山背妹」の座中月三年二十正大は眞寫多、鳥雛の門衛右雀、高定の幸梅、助之我久の(藏氏尾西)のもいしかつなふいと事判大の藏見

横顔を描く (一)

延若君シツカリ

高安吸江



鴈治郎が亡くなつてからもう三年になるが上方劇界はいつも常闇で、私の所謂黎明期もまだ一番鶏のけはひさへ感ぜられぬのは、いかにも心細いことです。

梅玉が特殊な女性としての妙技で此頃やうく一般に認

められてきたのは結構です。

しかし彼にしても廻車にしても元來が女形で、そこに一番

力のある藝が見られ、どうも故成駒家未亡人といふ感が深い。それで鴈治郎なき跡の中

心人物としてはやはり立役の延若に期待せねばなりません

即ち此の關西劇壇の暗黒時代に彼天星君の存在や如何にといふ事が問題になるのです。

若かりし日の延若を憶ふと奮闘また奮闘、人氣役者にふ

さはしい花やかな其活動振は恐らく近來に比類稀なもので

あつたと云ふも過言ではありません。そしてそれは一ツに

自信の強い彼の負けじ魂によつて仕遂げられたのでした。

彼の實父初代延若は名門の出でなかつたため、殊にさま

ぐの艱難辛苦を経て終に上方に於ける近來の名人として

明治十八年秋、五十四年の生涯を終へました。

その辿つて來た路があまりに慘ましかつたせいか、或は

他に理由でもあつたかも知らぬ

が、我子、即ち今の延若を役者にするのを好まず、幼時から芝居が好きであつた二代目が、そつと隠れて竹田や角丸

をのぞきに行くのを知ると、彼は「芝居など見いでもえい

」と直ぐ呼返へしたそうです斯うした父の意に反して、

其死後まもなく初舞臺を踏むやうになつたのは、種々と已

むを得ぬ事情があつたにしても、其自我を貫徹させるべく

彼延若の體内にひそむ天邪鬼的な反抗心の最初の現はれと

私共はそれを考へることが出來ます。

この心、反撥力とも云ひますか、種々の困難に出遇ふ程

強くなりまして、彼がまだ二十歳にもならぬ頃、家運が傾



(丈夫延だいは眞寫)

むいて著しい窮乏時代でしたが、青年一座の座頭格となり方々で奮闘を續けて相當な成績をあげたのも其一例です。それから暫くして上京し東京座での旗上です。此座は今日ではもう無くなりましたが明治三十年代には、現今の元老連が若手としてよく出演してゐた劇場ですが、此れが其

頃全く不況で、相當の役者を揃へても思はしくない成績であつたのを聞いた彼は、却つて我から望んで流行らぬ其芝居へ乗込み意外の好評を得ました。

日露戦役後は恰度昨今と同様に舊劇の魅力が少くなり、一般に不況が續きましたが、彼は或一部から墮落したとの非難をうけてもかまはず、朝日座へ入つて秋月や喜多村などの新派と合同し、こゝで此以前から擡頭して來た新作上演の機運を一層促進させ、多くの若いフハンから盛に歡迎されたのです。

此等は皆彼の反抗的勇猛心による天邪鬼的な活躍の然らしめる處であつたのは云ふまでもないことですが、彼はまた此れ程の成功を贏ち得るために必要な手腕を十分に備へてゐました。或は十二分と云ふ方が當る位に器用で多能であり、且又其父から受け繼いだ和らか味や艶の上へ、自己のもつ強い線と明朗さなどの混成により其役柄なども甚だしく多方面であります。

それは彼が是まで演じた役々から見ても明かで、先づ忠臣蔵の七役を始めとし辨慶、毛刺、和藤内から權太、團七、元右衛門、盛綱に松王、前髪もので勝頼、十次郎、三浦之助、軒かい方では純治、忠兵衛、いろは新助、得意なものでは雁のたよりに乳貫と數へ出せば果てしが無い。近年はあまり出さぬが以前は女形もやつて八重垣姫でもお三輪でも、何でも演れぬものは無いと云ふのが味噌らしく、そこにまた彼の負嫌いの氣性がよく窺はれます。

に反して、彼の腕が進み技が熟するに従ひ一般の後援振が次第に冷静になつて來たのは不思議と云へば云へます。

しかし此れが彼の生理的衰頽に基因するとは思はれません。それは舞臺以外に於ける彼が昔に變らず依然として精力旺盛であることによつて察せられます。イヤ時には變な宋美齡などが飛出すといふ噂さへあるではないですか。

近來彼の痼疾である喘息を顧慮したゝめか、或はどうかして新味を出させやうとの試みかも知れぬが、頻にフケ役を演らせるやうです。最近の頓兵衛、竹中官兵衛、此度の裁判事などがそれです。

彼は元來奇妙な特徴を具へ

てゐて、硬軟、善悪が二つの役で同時に相錯綜して現はれる、こゝにも天邪鬼式に兩極端の二分子が衝突する結果でもあるか、強かるべき役に時々弱味が加はり、敵役としてはあまりに善良過ぎる點が見えることがあります。

頓兵衛の善良も困るが、平河原の治郎藏の告白が引立たなかつたのも其れに因るからで、其代りにまた官兵衛などの複雑な心理は恰度眞向であり、同様に大判事なども幸にクライマックスまで其頑強さをもちこたへ得たなら、必成功するであらふと思ひます。こうした彼の持味を理解し本來の明朗性を活かすやうに努め、更に適當な女房役をあ

てがふ、此れが一番困難で、前述の如く梅玉、魁車の未亡人乃至老人女では圓滿な發展は六ツかしいが、とにかく彼が惚込んで藝が出来た女形を採し出すことなどによつて彼を奮起させることが必要です。

實際彼は惡戰苦闘によつて茨の道を切開き、常勝將軍として堂々關西劇壇に確固たる位置を握んでから却つて霸氣を失ふた、それは反撥心を起すに足るべき相手が居ないの

で、坦々たる大道を闊歩する平和な所謂飽和状態にあつた爲と考ふべきです。其證據には彼が苦手な先輩に對する時の態度は、全く別人の様に目立つて傑出する、例へば鴈治郎の忠兵衛に對する八右衛門

先代仁左衛門の與次郎に對する傳兵衛など殊に深い印象を與へたのもわかります。

要するに現今彼が上方に於ける第一人者であることは事實であると同時に、また彼が第一人者としての責任を果してゐないのも事實です。そこで彼のもつ天邪鬼的反抗心を喚起させ、其圓熟期の此年に有終の美をなさしめると共に沈滞したる劇界へ眞に黎明期たるの實を示すやうあつてほしいと、私は心から望んでゐるのです。

次號へ此の稿をつづける

つもりです

どうか御期待下さいませ

道頓堀企劃部

毎月

五万發行

を目指して一ト頑張りだ

ナイヤウもテイサイも近々にグンとかへるつもりだ。

映画のページ

を來月から増すことになった。

表紙にも思ひ切つて工夫を凝らしてみようとおもう……………

廣告の申込みが雜踏するので、要求に應じ切れるやう考へてゐる。

劇場内で読む雑誌はこれだけだ！

えごりかのちみよくきもたま
聲 鴈 廻 泉 黄 聞 再

—(時)—
—(所)—
—(物 人)—

一極記故

月樂 中

○座 村

○樂 治 鴈

日屋者郎

郎 一 柳 橋 新

記 今日(こんにち)は！ヤア、暫らくで
したナ

鴈 あゝ、これはくどうし
なはつた、まだあんな若い
のに……いつ來なはつた、
珍らしいんなア、あんなに
早う會ひたうてく

記 さう挨拶(あいさつ)されては痛み入
ります、實(じつ)はまだこちらへ

參つたのではないんです、

あなたの追慕(しよぼ)興行(こうぎやう)がこの二

月(がつ)また大阪(おさか)歌舞伎座(かぶきざ)で開(ひら)か

れるのについて、久方(ひさた)ぶり

であんたとお會(あ)ひしたいと

思(おも)つて○病院(びやういん)で一寸(いっしん)三十

分程(ぶんせう)眠(ね)らせて貰(もら)ひましたん

です、三十分(さんじふふん)いふても怪(あや)し

いものですから早(はや)う喋(しゃべ)舌(ぜつ)

つて消えやうと思(おも)つてゐます

鴈 それはく忙しい(いそがしい)ことで

もつといつまでも逗留(とどま)して

なはつたら……

記 いやくこの方は遠慮(えんりよ)し
ます

鴈 時にまた二月(にがつ)にわたの追(つ)

慕(ぼ)興行(こうぎやう)とかを白井(しらい)さんがや

つてくれはるといふ話(はなし)だす

がようやつてくれはると思(おも)

ふて喜(よろこ)こんでまんねん、こ

の間(ま)そつちから見(み)えたヒイ

キのお方(かた)から委(き)しう狂言(きやうげん)な

ど聞(き)かしてもらひました、

白井(しらい)さんにお禮(れい)状(じやう)出した

のですが、こつちの手紙(てがみ)は

着(き)かんさかい、あんなから

よろしう言(い)ふておいと

くんははれや

記 委細(ゐさい)承知(しやうち)、ところでこん

ども去年(こぞ)と同じやうに六代(ろだい)

目(め)が一(いっ)座(ざ)を連(つ)れて來(き)ますし

宗十郎(そうじちろう)も入(い)ります、大阪(おさか)は

三人(さんにん)の子達(こどもたち)に延若(えんわく)、梅玉(うめぎよ)、

市藏(いちざう)や若手連(わかしん)大(おほ)ぜい、魁車(かいしゃ)

も身體(しんたい)の調子(てうし)がわるくて休

ませてくれとのことでした

が、師弟(しでい)の道(みち)はさう勝手(かたて)も

いへぬと口上(くこうじやう)だけに出るこ

とに決(き)まりました

鴈 さうく、それは二三(にさん)日(ひ)

前婆(まへばあ)の便(た)りで知(し)りました

んや、あまり身體(しんたい)を無理(むり)せ

記

『吉原揚屋』『妹脊山吉

んやうにと言傳頼みまつさ
記 長三郎君も去年以來ズー
ツと養生中でしたが、もう
ちつと寝てゐられんといふ
ので出演して大いにやる筈
です
鴈 あれは扇雀と違つて身體
がわるいさかい心配だす、
出られまつか、氣をつけて
傍の方に心配かけるやない
とよう言ひ聞かしてやつと
くんははれ、扇雀はいま旅
やさうでやつぱりわたしの
物を演つてまつか、芳子も
大きうなりましたやろな、
會ひたいのは山々ですが、
こゝで會へたら、それこそ
もうしまひだつさかいハハ
……先を樂しみに待つてま
つさ

野川』『野崎村』みんな貴
方に縁もふかいし、嬉しい
でせう

鴈 そりや嬉しおます、妹脊
の久我之助も、野崎の久松
も昔懐しいもんだすな、こ

つちへ來てから、もう毎月
芝居つゞきで、ちつとも休
みがないのでわやだす、東



京から六代目がまた来てくれまつか、あの男はエライもんだす、この前「寺小屋」と「山科」でつき合ひましてびつくりしましたんや、五代目は偉うおましたが、六代目はまたいゝ役者だな、ウチの三人の子供もウンと仕込んで貰ふやうに前に頼んでおいたんやが、あ

れ切り會へんの、何とか頼みたいと思つてます、去年扇雀を中座から歌舞伎座の口上場へかけ持ちさせてくれたことを聞いて心から喜こんでましたんや、あれ・しよう言ふといとくんはな記 ちや、いづれ又、幾年か先で

鴈 まだ早うおます、この幕は右團次の所作事で、わては出まへんさかい、もつとゆつくりしてとくんはなれいま六道羊羹でも切りまんがな、二番目は「紙治」だす、孫右衛門は先代梅玉、小春は雀右衛門、おさんは梅幸といふ役割りだす、見て行きなはれ……けふは久

しぶりで嬉しおました、また早う來とくんはなれや記 えゝ有難う、その八方はこゝちやチト苦手です、ぢや御免鴈 待つてまつせ、みなさんによいふておいとくんはなれ



洋酒・食料品・罐詰屋

株式會社

横山商店

創業明治五年

大阪市東區豊後町三番地

電話東94代表三八六五番
振番口座大阪二八四七番

新 兵 行 進 曲

中 村 時 三 郎

昨年の舊臘、松竹京都撮影所へ入社致しまして、多年憧憬れておりました映畫界への第一歩を踏み出すことになりました。

映畫界へ進出したいといふことは私の久しい間の希望でもございましたし、大谷社長の御推薦もございました、十年の長い間育て下さいました師匠の中村時藏も喜んで私を映畫界へ送つて下さいましたので、こゝに長い間の念願が達せられまして銀幕へ進出することが出来ました。

それに、下加茂には、舞臺時代からの友人で、共に勉強も致しました好太郎さんと正太郎さんが居りますので、この映畫界の先輩の人達から何

かという／＼御助力を受けることが出来ましてどんなに心強いことかわかりません。

私は、大正三年、東京の四谷に生れまして、祖父や父が大の芝居好きだった關係上、幼い時から藝事が好きで、四谷小學校の高等科を卒業しますと直ぐ、中村時藏の門に入りまして、時藏の薰陶を受けて舞臺に立つ一方、舞踊や常磐津を稽古致しました。又、時藏の許にある一方、歌舞伎の新人で組織する研究劇壇若草座にも加入して、谷崎潤一郎氏の『法城寺物語』の藤原道長や、松居松翁氏の『雪の降る夜』の仁右衛門などをやつたりしました。この若草座は、その名の通り研究心に燃

える若い人達の集りですので舞臺稽古なども若い者同志だけに遠慮なく互ひの藝を批判し合つたり、火の出るやうな稽古を行ひましたが、これなどは随分お互の爲になつたことだと思ひます。

かうして、下加茂へ入社するまで、時藏の門下にあつたして、歌舞伎座、東劇、明治座などの舞臺を踏む傍ら、若草座にも出演して参りました譯ですが、その間、昭和十年一月、近衛一聯隊へ看護兵として入隊しまして、昭和十一年七月除隊するまで軍隊生活を送りました。この軍隊生活は、私にとつて、とても有意義なことでした、社會人として最も必要な自治精神などの

涵養に随分役立つたと思ひます。

扱て、舞臺の経験と申しまして、右のやうに甚だ貧弱なものなのですし、しかも、下加茂へ入社しまして未だ日も浅いにもかゝわらず、今度冬島泰三先生のシナリオ、演出の『木村長門守』に入社第一回主演をさせて頂くことになりました。

まだ、これといふ映画に出演もせず、たゞ、一刻も早く映画出演の経験を得たいと思ひまして、好太郎さんの主演された『風流荒大名』に、監督の冬島さんにお願ひして、ラストシーンの殿中の並び大名の一員に加へさせて頂きましたのが、カメラの前に立つ

たこれまでの初めての経験ですし、それも、ただ、大勢の人達と一緒にク及傷だ／＼と云つて走り廻るだけのことで、すので、映画に對するこれと云つた心構へもまだ充分分りませんのですから、果してこの木村長門守の大役をやりこなせるかどうか非常に心配致しておりますやうな次第でございしますが、この上は、『風流荒大名』で初めて御指導を頂きました監督の冬島先生に全身をおまかせするにとともに、先輩の好太郎さん、浩吉さんの御教示を受けてベストを盡す積りでございます。映画と舞臺とは、すでに、メーキャップからして全然異つておりますし、アクション

映 画 演 劇 の「浅 草」

(新國劇の浅草の灯)

大 久 保



若い女性が、今の映画と芝居をどんな風に観分けてゐるのか、此の一文はさういふ一つの角度の上からのぞいても面白い。近代女性の感覚を見出すによい。

—— 編輯生 ——

映画『浅草の灯』は、松竹大船作品で、去年暮に見た。そしてその記憶が次々の新作品に、ぼやけて行こうとする最近、芝居の『浅草の灯』を観た。共に原作は濱本浩氏で映画は、池田忠雄氏脚色、島津保次郎監督で、芝居の方は、新國劇上演、中野實氏の脚色に高田保氏の演出、その原作のストリ

なども、舞臺では形式美と云ふものに主きを置いて云はば非常に誇張した仕科が主となつておりますが、映畫では出来るだけ自然な、ありのまゝな、しかも、表情などは極度に繊細なところに力を入れなくてはなりません。又、臺辭についても同じやうなことが云へると思ひますが、私としては、一日も早く映畫の本質を握み、映畫の要求するリズムの線に従つて、私自身の個性を伸してゆきたいと思ひます。

映畫では、一カット或ひは一シーンが、それ／＼時をおいて、しかも、筋の順序に關係なく撮影されてゆくの、舞臺と違つて、そのカット内

徑はシーンまでの雰囲気と云ふものの連續がないので、その時の氣分をすぐ作りあげ、或ひは雰囲気にならず、馴れて表現せねばならず、これが一番むづかしいことだと思ひます。それには、臺本を何回も何回も読みかへして、自分の役の性格、ひとの關係は勿論劇全體の環境を把握して、一カット毎の撮影のとき、監督の指定通りに演技が出来る、カットとカットとの續きに一つのリズムが流れるやうに心掛けることが最も大切なことだと存じ、勉強しやうと思つてます。どうかせいで、お叱り下さいまして、映畫人として一人歩きの出來ますやうお導き下さいますやうお願い申し上げます。

て 觀 を 「 灯

子 陽 佐

作「十二階下の少年達」の作中にも流れて居る様に、懐古的な感傷で、あの時代の正義感を強調したものが、此の同じ原作を扱ひ乍ら、映畫と芝居になつた二つの作品を見て、私は今更乍ら、小首を傾けて考へさせられた。

先づ、映畫を見てこんな古い時代の物が、果して今の若い観客層で占められて居る映畫ファンに受けるだらうかと、一寸思つたりしたが、これは、時代物に現代的の息吹きをかけて居るのを逆に行つたものとも云へるし、又此の頃の人情を今の時代へ持つて來ても判る筈だし、と、うなづけない點はあるが、とに角その儘で済んで居たのに、芝居を見て、おや？と思ひつたのは、あの映畫で黙つて居た淺草の灯の色が、そしてスベイン風のつば廣帽のオペラ俳優（上原扮する）山上の衣裳を初め、麗子（高峰扮する）や、其他大勢の男女達の衣裳が、舞臺では、映畫の灰色から極彩色の絢爛目も醒める色に變へて居る事に氣付いた。そして、これは芝居の良さ強みだ、な、と思つた。寫眞では到底、此の淺草の灯の色、光、オペラ役者達の華やかな色に表現出來ぬのだと。が、それは次の與によつて

讀者と

記者の

ペーヂ

◆投稿して下さい
◆宛名・編輯部

座のこれに加はる由全く我々観劇ファンに取つて磨ばしきことゝ云はねばならない、以上讀者欄開設に當つて御挨拶する次第です。

— 立花 惠圃 —

讀者欄が新設された事は我々觀劇者に取つて此上もない喜びである。編輯部諸氏に厚く感謝の意を述べると共に益々道頓堀の躍進を希望する。小生は一月の中座を見て全關西歌舞伎の精銳をもつてされた所謂古典劇なるものを見て、更に多彩な古の演劇に於ける人情風俗を傳ふるべきそれらの演出を此上も引つゞいて上演されることを期待する、聞けば二月の歌舞伎座は故人中村鴈治郎丈の追善興行であり、そうして六代目一

松竹座の前を西へ御堂筋を渡つて二三間ゆくと右側に〃とんかつ〃新大和と書いた粹な黒塀の家がある。さだめし油臭い香ひのある家であらうと思ふと表看板のトンカツとは、凡そかけ離れてゐる。それは一度暖簾をくぐつて上つて見ると脂粉の漲る粹な構えに先づ吃驚する。月皎の描いた酔態の河合武雄の假名屋小梅、二枚折屏風になつた歌舞伎の繪看板宇野屋好みの部屋の調度すべてが芝居情緒をそゝる様だ。そして甘い料理で一杯飲ましてくれる。この家の主人公M君 併し皆んなは「マダム」といつてゐる。君と書く位だから正真正銘の男だ。此頃少し肥えて來たが若松屋の面影が

半減されて行つた。即ち山上（島田扮する）を初め麗子（加藤扮する）や一同の日本座樂屋の場に於て、その上手奥に、舞臺ある心持ちにて、其處から流れて來る藤唄によつて、芝居の不自由さをしみじみ寂しく思つた。此の場面は、映畫の獨壇上で、此のストーリー中でも特に、觀客を樂しませる此の一座が舞臺でやるジブシーの踊りや、劇中劇に「ボツカチオ」があり、カルメンとホセの特に摩利枝に扮した杉村春子の歌に踊りに、演技の魅力的なうまさを楽しめ、觀客席に野次に與太者達のいきさつ等もあり、これは到底、限られた舞臺に表現出來ぬ、映畫の強みだと、しみじみ舞臺の陰唄が高潮するにつれ、尙更スレと寂しさを感じた。同時にこれと共に云へる點で、殊に印象に遺つたのは映畫のアツプで表現された、あの時代の五拾錢銀貨や拾錢紙幣、それに今はもうない富士が射的屋の積煙草に並べられて居た點など、監督島津氏の細心な注意に微笑まれると共に、これは映畫の強み、芝居の不自由さだと、切に思つた。映畫はやはり、いろんな點で進歩的だ。時代の要求によつて、早晚取り遺されない迄も、遅れ

て行くのは寂しいのと、私はふつと掠めるほろ寂しい氣持で舞臺に再現されて居る「淺草灯」の山上（島田扮する）の、ボカ長に傾いて行つた麗子への愛着と憎惡の切ない心理描寫の「俺は男を棄てたんだ……」と、酒に紛らしての射的屋表で、麗子の畫に射的の玉を打つたりして居る場面を彷彿と乍ら、此の芝居氣たつぶりの場面も、映畫上ではスムーズに、男泣きに泣き乍ら無言で雨に濡れて、街を彷徨して居た山上（上原扮する）の胸中に、一入切ないものを感じさせられたが、と、此の雨の街の場面も、後の「大阪へ来い！」と、エフエクトで聞かす香取の言も、皆映畫獨自の自由性、強味だなアと、ぼんやりと思ひ出したりなぞして居たが、此處で見直して嬉しかつたのは、映畫のエフエクトの代りに、香取の大阪からの手紙を藤井に讀まし、山上に聞かし、折から飛鳥井の骨を抱いて紅子が登上、然も飛鳥井が生前好きで、座員共に美しい友情で相唱つてやつた前場でのオペラ歌詞の一節が、哀調をそゝつて此處で効果的に扱はれ、山上の惺惺に本然甦み返る男としての正義感に敢然目醒めて行く伴りは、流石にうま

どこかにある。すっかり新派の明石家張りて酔ばらふといつも假名屋小梅になつてゐる。

このマダムの手となり足となつてサービスしてゐる四五名の美妾年の中に小龍ちゃんと云ふ芳記正に十九歳の白いすうりとした貴川延三郎をつくりの子がある。船場のある大きな綿問屋の大阪流て云ふボンチであつたのが少きな時から女の子と許り遊びすつかり女性になりきつて家の反對も馬の耳に風役者になりたいと云つてゐる。物腰すべてが女性だ。曾我廻家の娘役だつたS君もある舞臺と少しも變りない美しい。

こんな人達が立ち變り入れ變り酒間に立つてサービスをしてくれるのだからカフェーや酒場などで飲んでゐるのと大分気分が違つくる、好奇心に驅れたといはうか異つた気分を味ふといはうか常連に知名の人が多い。

また宗街の一流ごころの妓の顔も見受ける。その一人に違ふと

「この兄さん達の優さしいことにはわてらかなひまへんわ」

と目おいてゐる。私の先輩に學生時代試験が始まるといつも吉原の「角海老」から學校に通つてゐたといふ遊蕩兒の標本みたいな通人がゐて來阪の砌「何處か變つた面白ところへ連れてゆけ」といはれたので、この新大和へ案内した。すると本人すつかり氣に入つて

なまじか、そんじよそこのの濃厚な色彩をした酒場の女や小使藝飲を相手にして飲むより洗練されてゐてすつと面白

いよ。といつて大阪の人となる毎に暖簾をくぐるそうである。そして東京と同じ粹人仲間に宣傳して喜んでゐる。この「新大和」も追々道頓堀名物の一つとして存在するであらう。

— 榊本緑之助 —

し、こうした、映畫と違つた不自由な限られた場面にも、効果的に芝居を盛り集めて來る老練な舞臺の脚色者の居る限り、お芝居の方も大丈夫だと思つた事だつた。尙ラストの點に就いて映畫の方は、唯だ汽車に搭られて大阪へと、あまりに常套的手法で、何この餘韻もなかつたのに引きかへ、芝居のラストは、あの歌舞伎座特有の舞臺裝置の淺草附近らしい灯を後に見せてきて、大阪へ……と、幕を下したのは良かった。

こう書いて來ると、松竹社内に居るだけに、と、まるで、何かに氣兼ねして、隱當なお座なりを書いて來た様で、ごちらに軍配が上つたとも解らないが、限られた頁と日數と、限られた筆力では、到底その役々の批評は元より映畫芝居それなりに就て多くは語れない。が、要は、映畫、芝居、兩「淺草の灯」を觀て、月足らずの觀賞眼、舌足らずの感想記で、その相違點だけ書きたかつたので、實は「ごちらに軍配を上げるか？」

と云ふ點になると、「教へて下さい。」と云ひたいのはこちらの方で、一長一短、一屬天然色映畫でいももう一本見たら……と、かくは、前記の如く、一寸小首を傾けて考へさせられた筆者なのですが、でも此の問題は、別に寂しがつたり、嬉しくなつたりして、小首を傾ける必要はないらしい。和食と洋食の好みの様に、解決しようとする方がどうやら無理らしい

(映畫の淺草の灯)



道頓堀月極め御購讀をおすゝめします

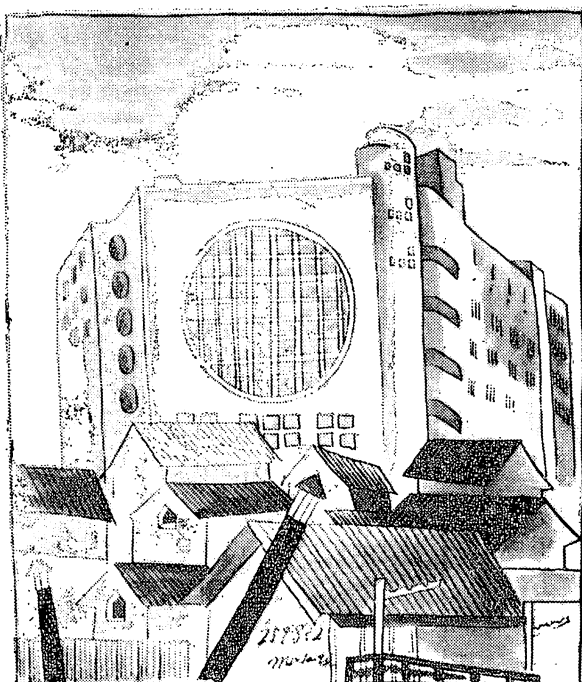
一ケ年—三圓三十錢

お申込みは編輯部

道 頓 堀 ・ 芝 居

佐 佐 木 工 之

カ ツ ト ・ 浦 正 樹



五座の櫓
カフェーの灯

喫茶店

かき船

宗右衛門町の夜景

芝居裏

坂町

道頓堀は狭いやうで廣い。大阪

の言葉、人情、風俗多分に川からの影響がある。水が大阪人の生活様式を規定してゐる。

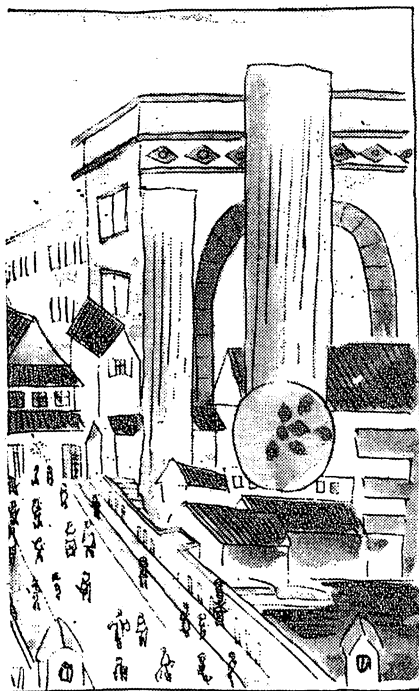
わけても道頓堀は、大阪文化の産みの親だ。私は大阪に生れ、大阪に育つた。二十七日の時東京へゆくまで、大阪の土地を離れなかつた。今また大阪へ歸へ

つてゐる。

私は鴈治郎の芝居を、たつた一度中座してみた。神戸の叔母のお供をしていつたのだつた。その時、鴈治郎は二十そこゝのやき男になつて頬かむり姿で舞臺へ現れた。東京から有名な俳優が來てゐた。しかし名は知らずに芝居を見て仕舞つた。叔母は大層氣に入つたらしかつた。初めから仕舞まで熱心にみてゐた。私も、とても綺麗なものだと感心した。

東京に行く前私は、或るキャバレーの演藝部にゐたが、女給がやる素人芝居の「もどり橋」の舞臺裝置を圖案部からとはれ、私も知らなかつたので、丁度前進座が浪花座へ來てゐたので、私は前進座の人は知らなかつたから、今、この雑誌の編輯をやつておられる源多氏を介してたづねてもらつた。その時、舞臺稽古の最中だつた。

大阪松竹少女歌劇が、毎年道



だが、芝居も段々むつかしくなる。トーキーと云ふものが、演劇の大半の人氣をかつぱらつていつた。しかし、一面にはそれだけ芝居を引き立てたとも云へる。それは、トーキーによつて價值づけられたものは、映畫のより演劇的なものであるからだ。トーキーの動きと、舞臺の動きとにひらきは、亀とすつぽん程ある。

舞臺でなによりいゝものは、出語り、囃し等だ。滋味のある

聲が、すだれや黒幕のうしろから聞えて来るのは、何んとも云へない。その他開幕前の拍子木、この拍子木の打ち方は、或る點劇の運命を價值づける。人々は、この拍子木の鳴つてゐる間自分の思考の中に開幕後の劇の進展を描いてゐることが出来る。我々が普通芝居を見る時は、主観性は俳優の一々の動作に左右されてゐる場合が多い。全々客觀的にみる場合でも、主観がいく分かは俳優の動作に共鳴し

てゐる。

これは確かに映畫以上の力がある。それは、映畫の客觀性と芝居のとは、我々が認識する對照の眞實さが異なるからである。一方はスクリーンであるからそれが如何に眞實であつてもスクリーンと云ふものゝ上での映像に過ぎないことを觀客は知つてゐる。ところが、舞臺の方は背景や裝置こそ、映畫の映像に等しいものであるが、生きた人間の動作がある。こゝに不思議なことは、映畫の眞實性が、舞臺より遙かに眞實であつても一般觀客に與へる感動はそれ以下であることなのだ。我々はアフリカの猛獸映画よりも、人間のはいつた舞臺上の熊に餘計恐怖を感じる。

私が東京から歸へつて、何よりも驚いたことは、道頓堀が、次第に昔の面影を消してゆくことであつた。たとへば、私の少年時代は、芝居茶屋と云つたも

のも、今より晴々しかった。仲居に送られて小屋へ這入る旦那や藝者の姿も、近頃はめつきり少なくなつた。新しい資本主義が輸入された道頓堀は、それだけ新しい、しかし、ある點では淋しく變つてゆく。時代の流れと云ふものなら仕方もあるまいが、鴈治郎死後の大阪劇壇の衰微が、その儘、道頓堀を歩く者にひし／＼と感ぜられるのは、これも、新しい時代のせしめる一つの傾向かも知れないが、大阪育ちの私には、何んだか物足りないものがある。

近代的な道頓堀は、丸万の鐵筋コンクリートの出現によつて古典的な道頓堀に訣別してゐるが、道頓堀そのものは、西洋風の建築物が出来たからと云つてより名高くなるものではあるまい。

これは道頓堀ではないが、千日前の歌舞伎座にしたつて、あれを、東京の歌舞伎のやうな和風味を持たせれば、土地の人



他國の人も、ヨーロッパ人も、大阪の歴史的文化價値を認めるにちがひない。

もうこゝ五六年もすれば、道頓堀から芝居茶屋は消えて仕舞ふのぢやなからうか、そう云へば、重を持つて芝居見物にゆく人もなくなるだろう。

私は、この芝居裏と云ふ名稱が面白いといつも感心する。

一概に云つて道頓堀は、幻滅の悲哀の多いとこだ、東京の銀座が近代タイアの男性とすれば大阪の道頓堀は、いく分モダン味のある世話女房的な女性を象徴してゐる。そこに、大阪と云ふ歴史的遺物がある譯だし、それが又、道頓堀の特徴なのだ。雨の降る日、殊に夕方のガスが道頓堀の五座の櫓をつゝむ頃、

赤い灯、青い灯がガスの中にと

もる頃、鐵筋コンクリートの戎橋に立つて、音もなく川面にとけこむ兩あしをみつめてゐると向ふ三味町のお座敷に明つてゐる近代的な照明さえも、とけぬ苦舌にからんでゐるやうな感じがする。

夕方大丸、十合あたりの女店員が、さつそうと歸へる時分は道頓堀風景も一時全く近代的に塗り變へられるが、それでも、その後に残るのは、いつも淡いセンチメンタルだ。

土地と云ふものに對する執着は、私は人一倍強い。それだけに、この幻滅を追はえる心も強い。

私は感傷的な道頓堀がすきだ人は氣がつかないか知らないが

私は何か道頓堀に幻滅を感じるそれは、結局、私の主觀がそう云つたものを絶えず追えてゐる精かも物れないが、どう云ふものだとされる、私自身も返答に困るのだ。

私は、それは道頓堀と云ふものが、あまりに濃艶なためだと思ふが、事實、道頓堀は、いつも厚化粧をした、上方風な世話女房風なのだ。そこには近松の義理人情が、今だに脈々と脈打つてゐて、往く人々をして、空想的なセンチメンタルを呼びもどすからだ。

若し、大阪府が、道頓堀から雑音を除去する府令を公布せなかつたならば、戎橋の橋向ふのキリンビールの屋上からは、近頃なら毎日男壯な進軍ラッパが、かうした近松風な感傷を吹きとばしてゐることであらう。

— 四三・一・二〇 —

シリウタオネに核結

…科病柳花…

院医原藤

★ 番 六六 三六 六〇 二六 戎話電 ★ 入西側ノ溝筋橋戎 ★

シリウタオネに核結

淋病にコナイン

淋病にコナイン

敏夫漫筆

林 敏 夫

舞臺と映畫は、どちらが、
むつかしい？

どちらが面白い？

どちらが、えらいです？

と、よく問はれる。舞臺と
映畫に對する俳優論に成ると
一つの論文で長々と書く程内
容は、むつかしく成つて来る

簡単に表現すると、映畫は
肉體的にえらいし、舞臺は、
精神的にえらいと言へる。

○

キヤメラの前に立つた時も
舞臺へ出た時も、緊張味の點
では變らないけれど、舞臺の
方が、うんと張合ひが有る。
撮影だと、一カットづつ、區
切られるので、まがぬける氣
味がある。

だが不便なのは、調子の乗
らなかつた時や、感じの出な
かつた場合は困る。

例へば「羽衣」の三保次で

一人舞の時十七日だった、
腰がくずれて足が少しひよろ
ついた。撮影だと「ア、すみ
ません」「ちや撮り直し」と
成るんだが、舞臺ではそのま

ゝ次の動作をつづけてゆく事
が、撮影に慣れた私にとつて
へんである。

一芝居二十五日のうちに、
自分自身で會心の出来と思ふ
日は少いのが本當だと思ふ。

○

一月の中座は、昨年の二月
鴈治郎三回忌追善興行で歌舞
伎座出演以來、約一ヶ年ぶり
の舞臺であり、中座としては
まだ平土間が榊であつた、子
役時分にふんだ以來で、なつ
かしい。舞臺俳優としての私
は、やつと一年生の入學であ
るわけである。

晝の部の「鏡山」では、烏
啼きの場の奴で、魁車さんの
お初の供をして出で、縁起の
悪いせりふを、しやべつてゐ

る。

「三途の川」だの「六途の
辻」だの「死んだ氣で」とか
「脈が上つた」とか言つて、
最後に「南無阿彌陀佛」とを
なへて花道へ入るのである。

この稽古の間に京都「ちも
と」の一人娘康枝さんが危篤
に成られたと聞いたんだから
氣にせざるを得ない。私のゐ
とこに當り、二十一に成る朗
らかな娘さんであつたのに、
遂に大晦日に死去された。元
旦の初日に、せりふを言ふの
が、氣に成つて仕方が無かつ
たわけである。

○

切の「羽衣」は伯龍と一し
よに出る舟子で、出来不出来
が自分で、はつきり分る位ム

ラが有る。もつとも、『よかつた』と言はれて、自分自身悪い筈だつたがなアと思ふ日もあり、自分で好調だと思つてゐても『よくない』つて言はれる日もある。一度でいゝから、自分の舞姿を見たいと思ふ。撮影所に働らいてゐただけに、殊にそんな慾望が強いのかも知れぬ。

○

子役時分は『豆成駒家』と聲がかゝつたが、今度は完全に豆ぬきの『成駒家』ばかりで、何だか子供から、はなれて、ふけた様な気がする。足もとで、小さく『成駒家』とか『林さん』とか言はれると、嬉しくない事はないが、くすぐつたい。自分の不出來の日に『成駒家』と聲をかけられると、すまないとい

思ふ氣に成る。舞臺へ出る氣持は毎日一生懸命である。それでも出來の芳しからぬ日が相當あるのは腕が出來てないのだ。勉強、くゝと考へる。中村芳子さんは五つ年下の叔母さんだが、『角兵衛の女太夫』なんか進境ありくゝと見える。舞臺がいこの時、つくゝ亡き鴈治郎に見せたい

一月十八日

中座樂屋にて

——チヨン。

演劇 飛行便

【東京】(二月興行) 歌舞伎座——新派大合同(四時開演) 中野實作並演出、「地靈」四幕

田島淳作並演出、「新版二筋道」二幕、川村花菱脚色並演出「愚かなる母」五幕(日、祭マチネ)「愚かなる母」【新版二筋道】

東京劇場——同場十周年記念、大歌舞伎(毎日三時開演)「根元草摺引」三「牧の方」三「石切梶原」四「五條橋」五「相馬の金さん」【廓文

章】

明治座——青年歌舞伎(四時開演)「大地」八場、二「勸進帳」三「山彦瀟八丁」三場、四「興話情浮名横櫛」二幕(日、祭マチネ)

第一劇場——五郎一座(四時半開演)「嵯峨野の雪」二「和尚さん」三「五色揚」四「新心子心」五「丑満頃」

【大阪】(二月興行)

歌舞伎座——中村鴈治郎退臺、東西合同大歌舞伎(晝十二時、夜五時開幕)晝の部「碁太平記白石噺

【面影如月帳】「新版歌祭文」船辨慶「夜の部」妹春山婦女庭訓「六歌仙客彩」暗闇丑松「大津繪春調娘七種」

中座——井上正夫一座、水谷八重子一座合同(二時半開演)川口松太郎並演出「三等局長」三幕、中野實作並演出、「新婚虎の巻」二景、北條秀司作、村山知義演出、三「華やかな夜景」二幕、竹田敏彦川村花菱脚色並演出、四「子は誰のもの」五幕

角座——關西新派劇二の替り(

(一月十九日初日二回大佛次郎作瀨川泰郎脚色、高谷貞澄演出)「逢魔の辻」九場、吉屋信子原作、中井泰孝脚色並演出「母の曲」三幕十場、同三の替り(二月十月初日二回)仲澤清太郎作、中井泰孝演出「戀愛共同租界」三幕長谷川伸作、木下計治演出、二「雪の宿場街」一幕三場、菊池寛原作、巖谷三三脚色、高屋貞澄演出、三「禍福」五幕七場

編輯雜記

源多生

※みな様から玉稿をいたゞいて編輯にとりかゝらうとした頃から聞いた風邪が、ついに中耳炎をよんで随分弱つたが、手をつけたからには二月號は自分で仕上げ度い、仕上げねばならない、と頑張つてどうか、かうにか出すまでにこぎつけた。

※お醫者には恵まれてゐて、一昨年も厄介になつた上六の淺井病院に轉げ込み、文字通り御厄介にあづかつた。名醫に全く信頼した安心が大いに僕を勇氣づけてくれたからこそ頑張り通せたのだとおもう。もう耳も大丈夫だし、本も豫定通りこれで出る。全くほつとした氣持だ。

※さて今月號は六代目らを迎へ合せて歌舞伎座の大成胸家追慕興行

に因んで名ばかり乍ら、中村鴈治郎追慕號とした「頼冠りの中は日本一の顔」と穿つた岸本水府氏の川柳にもある名舞臺は昭和十年二月一日「河庄の灯はもう消えた午前五時」限りに再び見られぬものとなつたが、此の立派な追慕舞臺を觀てゐると——いまま鴈治郎は生きてゐる——そんな感じがふつと湧く。それにつけても名優の舞臺は、何時の場合でも一世一代の心ぐみで觀ておくべきではなからうか。シルレルは生は一瞬にして、死もまた一瞬なりと言つてゐるが、藝術にも生命の流れはある。

※井上、水谷の中座が觀たいにも席がない盛況だ。このあひだN大學の先生である僕の友人が、僕の仕事場に來て「中座を觀て來たが俳優もうまいが、芝居（脚本、演出を特に指すらしい）もいゝ。近頃新劇の觀客層が、すこぶる巾を持ちつゝあるが、今度の中座をみてゐると、今一番人々が觀たがつ

てゐる芝居が、これに近いものではないかと思ふが」と語つてゐた。彼はこの劇を支持する層の大變廣いことを言つてゐるのだが、更に「關西新派が早くこれ程になつてほしいものだ。頑張れば、必ずもつとよくなりもつと發展するだらうに……」と残念がつて行つた。耳の病患がなかつたら逆らつて色々意見を交してみたのに残念なことをした。

※道頓堀から春は来る……。沓え返る寒空ながらかすかに春が感じられる。二月だといふに松竹座の前に「春のレヴュー」の櫻が咲いた古集におどる少女歌劇——踊るものより、みる方であつたかしがる。僕も道頓堀で十年を暮した。

※オヤオヤ、内容禮讃が留守になつた。だが百閒は一見にしかず※御執筆下さいました諸先生には何時も御無理をお願いしましてすみません。謹んで御厚禮申上げます。

昭和十三年二月十五日發行
月刊『道頓堀』第十三年
雜誌『道頓堀』第百廿七輯

◇誌代は前金お拂を願ひます。
◇郵券代用は一割増にて御註文を願ひます。
◇御相談の上廣告掲載の需に應じます。

廣告取扱所

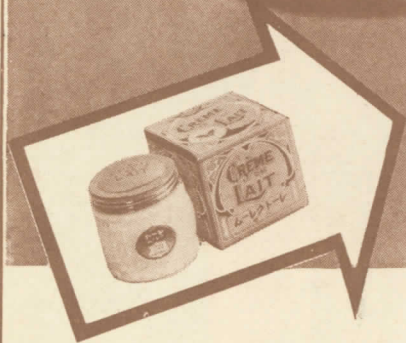
大阪電報通信社
大阪市中區中之島三丁目
廣告の御用は電通または當編輯部廣告係へ御申越下さい。

部一
金三十拾錢（壹錢五厘稅）

昭和十三年二月十五日印刷
昭和十三年二月十五日發行

大阪市南區久左衛門町八番地
松竹興業株式會社大阪支店
發行者 鳥江 鏡也
編輯者 松本 泰三
印刷所 道頓堀社印刷部

大阪市南區久左衛門町八番地
松竹株式會社大阪支店
發行所 道頓堀編輯部
京都支部
京都市姉小路東洞院西
大橋孝一郎方



.....のこゝもごく寒

。すで氣元 〴で肌若

どリトツシを^だは^す肌おい易レア

。すまり^くつ^だは^んかわ^ゆしい^せ肌若の春青しは潤^るう

ムーレクトーレ

店 商 年 賛 尾 平 京 東 舗 本 料 粧 化 ト ー レ

昭和十三年十月廿五日第三期郵便物認可
 昭和十三年二月十五日發行（每月一發行）
 昭和十三年二月十五日發行（每月一發行）
 昭和十三年二月十五日發行（每月一發行）

「道頓堀」

第十三年 第百三十七輯

一部金參拾錢

人斬り伊太郎

坂東好太郎主演

北見禮子共
 伏見信子演



脚色 藤井滋司・泉治郎吉
 演出 古野榮作

天野 双一
 山路 義人
 高松 錦之助
 坪井 哲
 志賀 靖郎
 風間 宗六
 中村 吉松
 山田 寅平
 助演